

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター



六浦こども園の園庭は、子ども達の動きを捉え、日々進化する園庭です。

土、山、木、草花、水など自然環境の充実、それぞれの力でチャレンジできる遊具など、常に子どもたちがワクワクできる環境を整えています。（一本橋やクライミングウォール、段々砂場や木工小屋、ブランコなど全て手造り遊具）

子ども達が豊かに遊びを創造し、挑戦的意欲を高めしなやかな能力を育みます。

関東学院六浦こども園H.P.より引用を含む
<http://mkg.kanto-gakuin.ac.jp/playground/>
(参照2020-11-10)



No.24
2021.3

関東学院六浦
こども園70周年

目次

はじめに	2
関東学院六浦こども園70周年の歩み	3
関東学院におけるキリスト教教育の歴史 ー多様性の尊重と共生の観点からー	14
学院長メッセージ	24
関東大震災後の「中学関東学院」におけるキリスト教教育 ー賀川豊彦・山室軍平・金森通倫 等をめぐってー	28
関東学院六浦こども園のステンドグラス・編集後記	32

は じ め に

関東学院 学院長 松田 和憲

今年度も、皆様の許に『学院史資料室 ニュース・レター』No.24をお届けできますこと、大変嬉しく思います。

2020年度は私たちにとって忘れられない年になりました。それは、言うまでもなく、コロナ禍の影響が世界中を覆い尽くし、わが学院においても、その対応に追われ、様々な分野、部署、また学校行事、日程、プログラム等で変更を余儀なくされた一年であったからです。しかし、感染が拡大する中であっても、学院各校の学長、校長、園長、そして法人の役員たちが何度も集まり、互いの情報を共有し、時には励まし合いながら、その時々で考え得る最善策を講じることができたことは特筆すべきことであり、こうした連帯感は今後の学院における教育活動に活かされていくものと期待しています。

わたしは、前号の「はじめに」の部分で、今後の小冊子編集について方向転換する意向であると述べました。そこには、前号まで学院の歴史を辿ることに力点を置いてきたのに対し、本号からは、15年後の創立150周年を視野に入れて、これからの学院の在り方・未来像・展望等について議論を深める小冊子にしたいとの思いがあったからです。

しかし、この度のコロナ禍によって生じた有形無形の影響を考慮するとき、本号において、何らかの形で、コロナ禍に関する記録、あるいは記事を掲載したいと考えました。さらには、それと併せて、ここ数年の間にあった出来事、周年行事の中で、まだ掲載していなかった事柄等を加える形で、本号を編集するのが妥当であると判断しました。そのような意味において、当初予定していた編集方針とはいささか異なった形態になったことをご理解いただきたいと存じます。

昨年度は、学院創立135周年にあたり、中学校高等学校



金沢八景キャンパス
3号館からフォースイト21棟、チャペル、中庭をのぞむ

創立100周年、六浦小学校創立70周年、そして、六浦こども園も創立70周年を迎え、それぞれの学校、園が工夫を凝らした意義深い周年行事を無事終えることができました。そこで、前号では、特集号と銘打って、各校のゆかりの深い諸先生方に執筆をお願いすることによって、味わい深い小冊子となりました。しかし、諸般の事情で六浦こども園の周年行事に関する記事を掲載できずに、記念礼拝・コンサートの写真を紹介するに留まりました。

そういう訳で、本号では、最初に「関東学院六浦こども園70周年の歩み」と題して、前園長の根津美英子先生、現園長の鈴木直江先生に執筆をお願いしました。両先生は、互いに連絡を取り合い、共同執筆の形で10頁に亘って、園の辿った足跡について詳しく論述してくださいました。戦後の混乱の中で、子供たちにキリスト教教育を行う必要性を痛感された中居京牧師が坂田祐院長の後押しを得て園発足に漕ぎ着けたエピソード、また、歴代の園長先生の教育に対する並々ならぬ思いや専用の園舎に辿り着くまでのご苦労談、さらには、新園舎が完成し、幼保連携型認定こども園として新たなスタートを切ったこと等々、70年に及ぶ園の足跡について生き生きと描いてくださり、大変興味深く読ませていただきました。

続いて、元学院宗教主任の高野進先生が2018年6月に大学八景キャンパスで開催された、キリスト教学校教育同盟総会において、「関東学院におけるキリスト教教育の歴史―多様性の尊重と共生の観点から―」と題して講演された原稿の全文をご本人の承諾を得て、掲載させて頂きました。学院の歴史を振り返る上で、有益な資料となるものと思います。

また、コロナ禍に関する記述として、学院のホームページに「学院長メッセージ」として記載した3篇を掲載させて頂きました。ある同窓生から、コロナ対応についての具体的な報告ばかりでなく、学院としてこの難局をいかに乗り越えるのか、学院長としての考えを内外に発信して欲しいとの勧めがあって書かせて頂いたものです。そして最後に、前号に引き続き、渡邊茂氏が関東大震災後の「中学関東学院」におけるキリスト教教育についての論考を寄稿してくださいました。それぞれ、大変お忙しい中、原稿をお寄せくださったことに心から感謝いたします。このような形で第24号を皆様の許にお届けできること、感謝します。

コロナ禍の一時でも早い収束を祈ると共に、皆様の上に主の変わらない守りと導きがありますよう祈ります。

関東学院六浦こども園70周年の歩み

関東学院六浦こども園 前園長 根津 美英子
 関東学院六浦こども園 園長 鈴木 直江

1948年、終戦後の社会の混乱も次第に治まり、休園していた幼稚園が次々と再興できるようになった頃、学院はすでに専門学校(後の大学)、中高、商工高等学校が新しい歩みを踏み出していました。キャンパス内には、多くの被災した教職員の方々が生活していました。そのような状況の中、中居京牧師を中心に篤き祈りの中に関東学院教会が創立され、キャンパスにいた教職員の子弟や教会員の多くの子どもたちにキリスト教教育を行っていくためには幼稚園が必要だと強く感じました。当時は近隣に幼稚園が無かったので、中居京牧師は将来に理想をもって関東学院教会幼稚園設立に踏み切りました。そして、中居京牧師を助けて坂田祐院長や石井晴美協力牧師、教会役員、教会婦人会、教会学校教師、創立当初の保母など多くの方々の尽力によって、1948年6月15日に開園の日を迎えることができ、新しい歩みが始まりました。関東学院教会幼稚園の初代園長は中居京牧師、主任保母は石井信子(石井協力牧師夫人)先生、保母は福本美知子(旧姓村岡)先生、秋場淳子(旧姓真野)先生の2名でした。園児は46名でスタートしました。毎日の保育は礼拝をもって始まり、保育内容は幼児に適したものを考え季節に応じて工夫され、先生たちが力を合わせ情熱をもって保育に当たっていたそうです。昔も今も、先生たちの姿勢に変わりありません。不自由なことが多かった状況の中での園生活でありましたが、子どもたちが元気に生活する姿は保護者の大きな喜びとなり、学院内の

人々を和ませ、平和の時代の到来の喜びを感じることが出来たそうです。また、創立当初から保護者の会が立ち上がりとても協力的だったそうです。これは、今の六浦こども園にもそのまま伝承されています。その後、専用の園舎に落ち着くまでの8年間に3度(1浴場→2教会堂裏→3旧神高跡)も引っ越しを余儀なくされたという事を知り、創業時代のご苦労は察するに余りあります。ただ、『園の周りの環境が広々として自然に恵まれ、子どもたちが四季を通じて広い原っぱを思いっきり駆け回って遊べたことが何よりの喜びだった』というどのような環境でも子どもたちにとってより良いものとしていこうとする先生たちの思いに触れ、心があつくなりました。

1956年2月、学院の最西端に待望の4専用園舎が完成し、移転しました。当時にしては斬新なブロック建築の平屋の園舎で小さいながらプールも設置されていました。創立以来の労苦をされた先生方は退職され、下田静恵(旧姓小村)主任以下3人の新しい先生方が保育をされました。この年の秋、初めて専用の園庭で運動会を親子、教師共に楽しく行いました。



水遊び(奥にプール)

1963年4月、第二代園長として、広井修先生(1969年専任となられる)が法人本部総務部長を兼務のまま就任されました。この年、創立15周年記念としてホールを増築しました。石炭ストーブから集中暖房に切换えたのもこの頃で、施設も内容も充実してきました。



関東学院幼稚園卒業式 1953年

1 旧海軍航空技術廠工員養成所跡(浴場だった所)

2 大学礼拝堂裏、現在の金沢八景キャンパス 大学7号館あたり

3 大学青雲寮の中寮(学生寮で小学校校舎、一部女子神学生の寮としても使用された)、現在の六浦中学校・高等学校の体育館あたり

4 現在の金沢八景キャンパス、大学西門傍



園章・園旗 1985年頃卒業式

1968年1月、創立20周年を記念して新園章、新園旗(関東学院小学校校長で芸術家の水船六洲先生デザイン)が披露されました。子どもたちも増えクラスも増えて、幼稚園は活気に満ちていたそうです。忘れられない出来事として、日本各地で起こっていた大学の学園紛争のあおりをキャンパス内の幼稚園も受け、大変怖い思いをしながら子どもたちを非常口から避難させたことがあったそうです。今の私たちには想像もできない非常事態の中にあったのだと思います。当時の先生たちの勇気と決断に敬意を表したいと思います。(以上は、関東学院女子短期大学附属幼稚園の主事をされていた佐々木昭子先生が書かれた『関東学院一二五年史』の文献を参照しています。)



園庭でお絵かき 1976年

1979年4月、関東学院六浦小学校東端に新園舎が完成し引っ越しをしました。(鉄筋2階建て一部地下)筆者(鈴木直江)はこの年、関東学院幼稚園に就職致しました。新園舎への引っ越しや入園・新年度の準備など、何もわからず先輩の先生方に教えていただきながら、様々な業務を行っていたことを思い出します。私にとって園舎も園生活も1年目。無我夢中で過ごす毎日の中で、保育が終わった後に保育室の一室に先生たちが集まって、何曲も賛美(子どもと賛美している曲も含め)をした事を覚

えています。神さまの香りに満たされていた祝福の時間は、今でも私の心の糧となっています。

しかし、この頃すでに全国的な幼児人口減少の厳しい現実があり、本園にもその現実は少しずつのしかかっていました。園児数減のため、1980年9月より急遽3歳児クラスを1クラス増設し人数確保に努力しましたが、状況はなかなか好転してはいきませんでした。新任であった私には詳しい事はわかりませんでした。広井園長先生はじめ諸先輩先生方はさぞかしご苦勞をされていたのだと思います。毎朝の祈祷会で、幾度となくその事が話題になり何か良い策はないかと皆で祈り求めていたことを思い出します。この頃、クラス数が減り、姉妹園の関東学院野庭幼稚園に人事交流として異動された先生方もおられます。

1981年4月、組織変更により女子短期大学附属幼稚園となりました。幼児人口減少という社会現象に伴い経営が困難になった事と女子短期大学幼児教育科に実習園として附属幼稚園が必要である事などの目的があったからです。第三代園長事務取扱に林淳三女子短期大学長が兼務することとなり、中田弘良女子短期大学幼児教育科教授が主事を兼務されました(1981年4月~1985年3月)。定員数も200名だったところを125名に変更して再出発しました。附属幼稚園となり、年間を通して各クラスに多くの実習生を受け入れることとなり、先生たちは子どもたちとの生活とともに実習生を指導する事になりました。戸惑いや苦勞もありましたが、クラスに実習生が加わって保育を行う事は、自分たちの学びにもなりその重要性を認識していきました。



すべり台おひろめ(テープカット) 1985年

1985年4月、佐々木昭子先生が関東学院野庭幼稚園より、附属幼稚園主事として異動となりました。佐々木昭子先生は、関東学院幼稚園時代に先生としてお勤めになられていました。立場は変わられても、子どもたちに対

する愛情は何も変わらず、キリスト教保育の土台を大切にされていらっしゃいました。佐々木先生は、素話がとてもお上手でお話が始めるとどの子もじっと耳を澄ませて聞き入る姿が、今も心に残っています。私は佐々木先生より本当に多くの事を学ばせていただきました。

1988年3月、林淳三園長事務取扱は任期満了につき退任され、同年9月に下田哲女子短期大学長が兼務の園長として就任されました。同年4月には本園と野庭幼稚園の主任教諭交替が行われ、川上信子主任教諭は野庭幼稚園へ、筆者(根津美英子)は同年4月に野庭幼稚園から、本園に転勤となりました。

同年10月には創立40周年記念式典を女子短期大学チャペルで、レセプションを幼稚園ホールにおいて園児、保護者、現旧教職員、大学関係者など約300名が集い盛大に行われました。筆者は転勤するや否や40周年記念事業を主事と共に担うことになり、園にも慣れない中、記念誌や招待者の準備に日々追われたことを思い出します。

同年の園児数は定員200名のところ143名(3歳児1クラス4歳児2クラス5歳児2クラス合計5クラス)、6クラス体制の園舎の1クラスが空き保育室でした。翌年の1989年には6クラスとなり空き保育室はなくなりました。

1980年、園児数確保のために始めた3歳児保育ですが徐々にニーズが高まり、1990年には園児が32名となりました。本来でしたら2クラスにしたいところですが、保育室がないため、1クラス2人担任で行うことになりました。3歳児にとって集団の規模は重要であり、担任が2人であっても適正な人数の必要性を実感しました。

1991年には4歳児、5歳児共に3クラスずつとなり既存の保育室は全て埋まりました。そこで3歳児の保育室を確保するため、園長室を保育室に改修して15名限定で園児を受け入れることとしました。そのため園長室は会議室に移動しました。もともと園舎は2年保育(4・5歳児)6クラス体制で整備されており、3歳児保育を行っていくためには保育室を増やす以外にはありませんでした。そしてこの後、園長室、会議室(兼図書室)職員室が次々と保育室に改修されていくことになります。この年には関東学院六浦小学校の新体育館完成に伴い旧体育館が撤去され、幼稚園の園庭が広く使えるようになりました。それまで新体育館建設が幼稚園の園庭であったため、建設中及び旧体育館が撤去されるまでは、非常に狭い園庭で苦慮していました。広くなった園庭には新しいブランコや鉄棒、築山、子ども用ログハウスなどが設置され、

子どもたちの外遊びが豊かになりました。

1992年、小玉敏子女子短期大学長が兼務で園長に就任されました。小玉園長先生は大変お忙しい中、行事の度に足を運んでくださいました。遠足に出かけるバスを見送る姿や職員旅行で先生方に溶け込んで気さくに談笑される姿が印象的でした。

1993年、再度中田弘良女子短期大学幼児教育科長が兼務で主事に就任されました。

1996年、1991年以降園長室を改修した小さな保育室で15名を定員として3歳児保育を行ってきました。しかし3歳児入園の応募者も多く、抽選で入園をお断りする数も増えてきたことから、将来的な園児数確保と安定を図ることも視野に入れて、3歳園児数とクラス数を増やす決断をしました。そのため、引っ越したばかりの園長室(会議室)を更に保育室に改修することになりました。3歳児が2クラスとなり、これで園は8クラス体制となりました。

1997年、朝倉陸夫女子短期大学幼児教育科長が兼務で園長に就任されました。3歳児を2クラスに増やし、園長室、会議室を保育室に改修したものの、人数に適した広さとは言えず、トイレは職員室を通り抜けた先にあるため、子どもにも保育者にも厳しい環境でした。

2000年、園庭に大型遊具(少子化対策補助金)が設置されました。園庭の景色も変わり、子どもたちの挑戦する姿や仲間と活発に遊ぶ姿が見られました。



園庭に設置された大型遊具

2001年、所澤保孝大学教授が野庭幼稚園園長と兼務で園長に就任されました。それに伴い本園主任の根津美英子が主事に就任いたしました。兼務ではない専任として初の主事でした。同年、園舎に付帯していた通路をなくし、3歳児保育室の拡張とトイレの設置工事を行って3歳児保育室環境の充実を図りました。これで何とか園児数に見合う広さとトイレ環境が整いました。

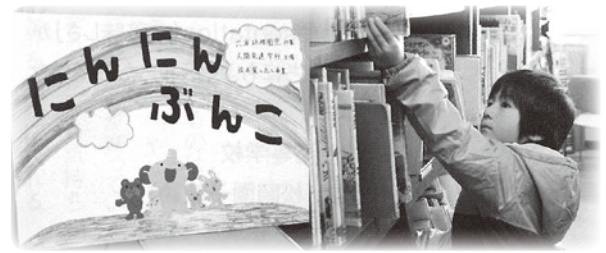
2003年、短大が大学へ改組となり、それに伴い、関東学院女子短期大学附属幼稚園から関東学院六浦幼稚園と名称が変更になりました。同年からすでに園内で行っていた「子育て講演会」を地域に開いたかたちで開始しました。著名な先生や絵本作家など幅広い講師をお招きし、ポスターやチラシを手作りし、区役所や地区センター、各町内会へ配布し、毎回多くの保護者や地域の方々が参加してくださるようになりました。

2004年からは地域に向けた園舎開放を週1回実施し、未就園児親子が集う場となりました。

2005年、本園主事を務めていた根津美英子が園長に就任いたしました。専任で保育現場からの園長は初となりました。同年、入園の低年齢化が進む社会のニーズに対応し安定的に園児数を確保していくために、3歳児クラスの増加を図り、2クラスから3クラスになりました。そのための保育室は職員室を当てることとなり、職員室は教材室に移動し職員室を保育室として使用することになりました。3歳児は3クラスになり全学年合わせて9クラス体制となりました。毎年のように部屋の移動や工事が行われ、先生方は引っ越し作業と保育室整備に大わらわでした。職員室を保育室としたため受付と事務スペースがなくなりました。仕方なく玄関に近い保育室の一部をパーティションで仕切り、狭いながらも事務スペースを確保しました。しかしそこは保育室、子どもの声がにぎやかで電話の音が聞こえず、机の下で通話している事務の先生の姿に一同苦笑でした。園長室、会議室はなくなり、職員室もついに教材室に移動となりました。教材室は非常に狭く職員室の机が全部入るのかと心配でした。そこで模造紙に見取り図を描きパズルのように組み合わせあれこれ考えました。結局全員の机は収まらず、2人で1つの机を使う先生も出てしまいました。職員室は肩触れあうような環境で、みんなが座ると通れなくなりました。筆者の席は曲がりくねった一番奥でしたので、大地震の時には諦めよう・・・と覚悟をしたことを笑い話のように思い出します。教材室もなくなりましたので、園舎外側に大きな物置を購入しました。また大学の部室など空きスペースもお借りしました。狭さと園舎のやりくりで大変苦慮しましたが、みんなで力を合わせて園児を確保しながら新園舎を心から願い、祈りを合わせて乗り切ってきたように思います。

同年には大学人間発達学科との連携事業、大学演習室内の絵本の貸し出しを行う「にんにん文庫」が始まりました。毎週1回の貸出日には学生さんが協力してくださ

り、親子で楽しみに通う姿や、学生さんの読み聞かせに聴き入る子どもたちの姿がありました。現在も継続されていることは感謝です。



にんにん文庫

2006年からは金沢区役所と協働で子育て支援事業に取り組み、「スマイル子育て実行委員会」を立ち上げ、地域の子育て支援者と共に子育てに関する様々な会や親子コンサート、親子遊びの会などを実施しました。同年、国のつどいの広場事業(未就園の親子の居場所)にエントリー、狭き門ではありましたが審査会を経て受託する運びとなりました。そして同年12月「関東学院親と子の広場おりーぶ」が誕生しました。幼稚園での受託は全国的にも珍しく、横浜市では初めてのことでした。当時はまだ子育て支援拠点ではなく公的な広場としては金沢区第1号となりました。数年前から地域とつながり子育て支援事業を進めてきましたが、関東学院の資源を生かしさらに充実した子育て支援をとうようになり、地域のニーズも感じながらこの広場事業を目指すようになりましたが、受託に至るまでには大変な紆余曲折がありました。当初この事業は園が非常に手狭なため、大学の場所をお借りして行う計画でした。大学の先生方の中には積極的に協力してくださる方もありましたが、その道は開かれず、最終的には園舎内で行うこととなりました。園のホールを週3回広場として使い、夏休み中はエアコンのある一階保育室に移動して広場を行いました。引っ越し作業は慣れているものの日常的な物の移動はとて大変で、先生方の理解と協力なしには出来ないことでした。また広場のスタッフはすでに区内で活躍していた子育て支援者が担ってくださいました。その後、年月を経てスタッフは独立してそれぞれの広場を主催するようになりました。また広場に來ていた親御さんも卒業して広場を支えるスタッフになるという嬉しい循環がつけられていきました。この頃、子育て支援にかかわる大学の先生のご協力によりお父さんプログラムが行われるようになり、お父さんの会の前身となる会も誕生しました。市長出席の下、金沢公会堂で行われた「子

育て会議」では本園のお父さんがシンポジストとして登壇しました。また同年には預かり保育(神奈川県補助事業)「ろばの子会」が開始されました。また年度途中からは発達・臨床心理士のスクールカウンセラーによる子育て相談「すくすく」が始まりました。子育ての悩みや発達に心配を抱えている親御さんも多く、経験豊かな専門家である大賀たえ子先生が担ってくださり好評でした。当時カウンセラーのいる幼稚園は珍しく園への信頼につながりました。

2009年、創立60周年記念礼拝と記念コンサートが大学人間環境学部チャペルで、レセプションが幼稚園ホールで行われました。園児と保護者、現旧教職員、招待者を合わせて約480名が集いました。学院長森島牧人先生のメッセージにゴスペルシンガーの森祐理さんのコンサート、加えて奏楽や賛美、楽器演奏、舞踊と卒業生の協力と活躍が光る心温まる会となりました。

同年、子どもたちの豊かな体験を広げることを目指し、「その道のプロと出会う」をコンセプトに子どもにかかわってくださる先生方を学内で募集しました。そして同年2学期から大学教員の照沼晃子先生と学生さんによる課外活動「子どものアトリエ」が始まりました。アート活動は大変好評で、小学校に行っても続けたいとの声が寄せられるほどでした。子どもが持つ創造力と感性が引き出される場となり、園の教育目標とも重なって、大切な活動と位置付けられました。後に園の特徴の一つとなり新園舎構想にまで影響を及ぼす活動となりました。また同年には親御さんの就労等によるニーズを踏まえ、希望者を対象に学内調理によるお弁当(申し込み制)が開始されました。

2010年、週1回の未就園児親子クラスが始まりました。

同年、運動遊びの課外活動「げんきっず」が始まりました。早稲田大学の前橋明先生にご相談し推薦していただいた澤田スポーツクラブは研究発表にも取り組まれている質の高いスポーツクラブで優れたスタッフと充実した楽しい内容が評価され、大人気の活動となりました。

2011年、念願の新施設建設が決定しました。思い起こせばクラスの増設や老朽化で厳しい施設状況の中、保育や子育て支援に取り組んで10年が経過していました。また認定こども園の制度が出来、将来構想を新しいシステムによる認定こども園と目標を定め、新施設の必要性を毎年訴えて8年が経過していました。その間保護者会も協力して下さり様々なかたちで建設をアピールし私

たちをバックアップしてくださいました。建設は決定しましたが、場所がなかなか決まりませんでした。二転三転しながらも最終的に現在の場所(大学の旧駐車場及びグリーンスペース)に決定したのでした。これまでの立地が奥に隠れた目立たない場所でしたので、バス通りに面した目立つ場所が与えられたことは大きな喜びであり感謝でした。新施設建設までの歩みは幼稚園という小さな組織ゆえの厳しい現実もあり、行きつ戻りつの日々でした。困難や試練と思われる出来事も多々ありましたが、神さまのみ心を問いながら全てを明け渡していく時に必ず助け手が与えられ、道が開かれていきました。時間がかかりましたが私自身全ては神さまのみ手の内にあることを何度も実感し、神さまへの信頼が深められる体験を重ねることが出来ました。また思いを分かち合う同志が与えられていることは大きな恵みであり支えでした。全ては必要な過程であったことを思われ感謝でした。建設場所が決定された後はすばらしい設計事務所にも恵まれ、具体的な構想へと進んでいきました。開園を2013年4月とし、それまでの2年間は設計担当の環境デザイン研究所の井上寿氏がファシリテーターを務めてくださり、教職員全員と大学教員、親御さん、子どもたち、地域や区役所の方々にも参加していただき「夢のこども園」を目指してワークショップを積み重ねました。また研修会や施設見学も行い、保育内容を見直しながら施設構想を煮詰めていきました。夢が現実になっていく過程では喜びと期待がある一方、理想の保育を追求する余り意見の違いから暗雲が立ち込める場面もありました。しかしそれも必要なプロセスでした。

こども園は保育園機能と幼稚園機能と子育て支援機能を併せ持つ施設です。本園が創立の頃から掲げているキリスト教保育と教育目標に掲げている「主体性」「創造性」「思いやりの心」を育むべく保育理念と保育内容が検討され、施設構想に生かされていきました。主体性と創造性を育むために、協働スペースとアトリエスペースが設けられました。本園は大学との連携活動としてアート活動が行われてきました。また世界で最も優れた幼児教育と称される「レジョエミリアの乳幼児教育」の理念に共感し、お茶の水女子大学の刑部育子先生を講師に招いてレジョエミリアの教育について学びを重ね、施設構想にもその理念が生かされることになりました。

また、園庭は自然豊かで子どもたちの主体的な活動と遊びが保障され、挑戦の意欲が育まれるプレーパーク(冒険遊び場)のような場を目指すことにしました。園庭

に森を作ろう、そうおっしゃった園庭の設計者である中津秀之先生と埼玉県まで出かけ、造園やさんを回りながら一本一本の木を選ばせていただきました。電車の中でパンをかじりながら巡った忘れられない小さな旅でした。



いのりのホール

また3階にはホールと保護者の活動スペース、大学連携スペースが設けられました。ホールは神さまの愛を心象風景として子どもたちの心に刻んでほしいとの願いを込めて、「いのりのホール」と名付けられ、グラスアーティストの三浦啓子氏による大きなステンドグラス「悦び」が設置されました。表参道のユニオンチャーチにある先生の作品に出会った時の衝撃は今も鮮明に残っています。先生にお願いしたい思いは膨らみましたが、大変著名な先生であり、断られることを予想しながら、それでも先生の温かいお人柄を信じて体当たりでお願いをしたことを思い出します。引き受けていただけたことが奇跡でした。作品については以下先生へのインタビューを引用します。「今回の作品のテーマは『悦び』です。天からは聖霊が降り注ぎ、その象徴として鳩が舞い降り、そこには12の輝きがあります。ヨハネの黙示録にも出てくる命の木は、年に12回の実を結ぶとあり、それを光の塊で表現したものです。園長の根津先生からのご依頼もあり園児を表す子羊と、イエスさまを表す羊飼いを作品に加えています。聖霊が子どもたちに降り注ぎイエスさまに導かれる、それはまさに『悦び』だと思います。』敬虔なクリスチャンでいらっしゃる先生との出会いは大きな恵みでした。約1年の制作期間の間に神戸の工房を訪ね制作過程を見せていただきました。先生も幼稚園に来てくださって子どもたちと触れ合う時間を持ってくださいました。後日「子どもたちのお顔を思い浮かべながら羊のお顔を制作しています。」とコメントをいただきました。また、光の塊であるガラスの塊は大

変高価なもので、予算的なこともあり当初は入っていませんでしたが、ユニオンチャーチの作品が私の頭から離れず無理を言って入れていただくことになりました。光の塊は触ることが出来、その感触もあわせて子どもたちの心に残ることと思います。時代を越えていついつまでもこども園のシンボルとして見る人の心に輝き続けることを願っています。

2011年、こども園開園を想定した上で、広範囲から通園している本園保護者のニーズを踏まえ、通園バスの導入を図りました。第一段階では京急バスに委託をし、保護者の活動も盛んなことから、必要な方は親子でも乗れるかたちになりました。旧型のリムジンバスは大型で、子どもたちも遠足気分でした。2012年度からは大新東バスに切り替え、関東学院六浦小学校との共同運行となりました。兄弟関係も一緒に乗ることが出来ました。2013年からは運行管理だけを委託し、自園の園バス2台での運行となりました。



新園舎完成 2013年

2013年、新園舎が完成、移転し幼保連携型認定こども園「関東学院六浦こども園」として再スタートを切りました。敷地面積3489.56㎡ 建物面積2688.60㎡ 定員は保育園60名、幼稚園200名 総定員数260名のこども園となりました。

当初はこども園全体として200名の規模で予定していました。現在は規定が緩和されましたが、当時は定員の適正化という縛りがあり、幼稚園部分の定員が下げられず、幼稚園200名に保育園60名をプラスするかたちとなりました。

施設の特徴としてはアトリエスペース、ランチルーム、異年齢交流が出来る協働スペース、大学連携スペース、保護者活動スペース、広場「おりーぶ」の専用スペース等が設けられました。保育園園長は前公立保育園園長の高橋和子先生、幼稚園園長及びこども園園長は根津美

英子が就任いたしました。

2013年3月30日、約100名の方々の出席の下、新園舎の献堂式が行われました。園長は挨拶の中で「建築家ヴォーリズが、建築物の品格は、人間の人格のごとく、その外観よりもむしろ内容にある、と言っているように、教育内容はもちろんのこと、人やモノや様々な環境をはじめ、目には見えなくとも、子どもにとってをまず大切に考える、そのような人の思いを大切に扱っていく施設にしていきたい」また「大人の何倍も有能な学び手である子どもの『感じる心』と『発想力』『好奇心』が引き出されて夢中になって取り組み、大人も一緒に探求する中で、豊かな学びや成長につながっていく、そのような保育を目指していきたい」「何よりも未来であり希望である子どもたちが喜んで集い、イエスさまの愛と光を受けて、一人ひとりの命が輝く場となるよう教職員一同力を合わせ祈りを込めて保育にあたっていきたい」と述べました。

2013年4月11日こども園になって初めての入園式が行われました。

園児数は、乳児46名 幼児203名 総園児数は249名となりました。教職員数は3倍に増え49名となりました。

新園舎、新システムによるこども園初期の混乱

新園舎は子ども環境のプロ、世界的な建築家の仙田満先生の設計によるものです。素晴らしい環境でしたが、子どもたちも私たち保育者もどのように使ってよいのか日々、試行錯誤の連続でした。3~5歳児全ての幼児が環境を自分たちの居場所にするために様々な試行錯誤を繰り返すことになりました。施設内はオープン空間で壁や柱が少なく、子どもたちはその広さを確かめているかの如く走り回り、ネット遊具やロフトに登りました。保護者の方からは心配の声も上がり、その誤解を解くのが大変でした。また、天井高のために音が反響するので、吸音効果のある布を天井から垂らしたり、部屋のロッカーを協働スペースに出すことなど様々な工夫をしてみました。私たちは、幼稚園時代の遊びや学びを子どもたちに経験してほしいと環境設定に追われる日々でした。そして、2号・3号(長時間保育を利用)認定の保護者への配慮を含めた園行事や手紙の内容の見直しも必要でした。このようにこども園となった1~2年は、毎日があっという間に過ぎていったように思います。段々と生活に落ち着きが出始めると、もっとより良い環境設定をと考えるようになりました。そこで先駆的な施設(複数)へ見学に

行き、自分たちの園に必要なものを見つけ出そうとしました。そして、大学の先生からもアドバイスをいただき、2階のアトリエの構想が出来上がりました。元々、1階は園庭とつながりのある動的な空間として土粘土や絵の具等ダイナミックな活動の場でした。そこで、2階は静的な空間でより自分の興味関心を探求できる場にしていくことにしました。広々としていた空間がいくつかに仕切られ、選ばれた画材や素材、教材が置かれ子どもたちが表現したくなる環境に変化していくと、子どもたちはその中で自分の感じたままを形に表現して、楽しむようになりました。



アトリエ活動

アトリエ活動の充実

2013年、1階のアトリエは大学教員の照沼晃子先生とゼミの学生さんにより様々な画材や教材を取り入れて活動していま



した。子どもたちは魅力的な材料に出会い、より豊かな表現活動を楽しむことができました。また、2階のアトリエは2016年9月より静的な空間として設定され、日常的に子どもたちが画材や教材を選び、制作できる場になりました。子どもたちは、じっくりと集中して表現活動に取り組みました。

2017年度より、瀧田節子先生(元お茶の水女子大学附属小学校アート教諭)がアート活動に加わってくださいました。様々な素材で自由で豊かな活動が展開され、子どもたちの発想が豊かになり表現が変わっていききました。そのことを通してアトリエリスタ(芸術士)の存在の必要性を思わされました。その後、2階のアトリエにも非常勤ではありますが、アトリエリスタの配置が実現しました。これからはアトリエリスタと情報を共有しながら

らアトリエ活動の充実を図っていきます。

大学との連携

大学との連携は以前から行われていましたが、こども園になり教育学部・看護学部・栄養学部と多様な連携が行われるようになりました。内容は、アトリエ活動の充実や個別支援の必要な子どものケース会のサポート、実習生の受け入れや研究協力、体力測定や大学授業への協力など様々です。大学との連携によって、教育・保育が充実していききました。

お茶の水女子大学こども園との交流・研究発表

2016年、お茶の水女子大学こども園が開園すると同時に本園との合同研究会が始まりました。子ども主体の保育を推進する2園が集まり、保育実践を語り合いながら様々なかたちで学び合いの時を持ちました。同時に本園の保育者1名がお茶の水女子大学こども園に保育者として勤め、2年間の学びを経て戻ってきました。同じように2018年からも本園保育者1名が2年間の学びをしてきました。

2017年第70回保育学会、2018年第71回保育学会、2019年第72回保育学会において2園共同で研究発表を行いました。また、2017年、2018年「お茶大こども園フォーラム」で実践発表を行いました。3年間に渡って、お互いの園を行き来しながら、様々な角度で子ども、保育、こども園について語り合い学ぶ機会が与えられたことは大変有益であり感謝なことでした。お茶の水女子大学の先生方にも大変お世話になりました。その他にも研究発表では、本園管理栄養士と看護師が第56回食生活学会、第13回食育学術会議で研究発表、実践発表を行いました。また、2019年第10回幼児教育実践学会では本園単独の研究発表を行いました。

また、保育関係書籍『子どものやりたい!が発揮される保育環境』学研出版、『子どもが育つ遊びと学び - 保幼小の連携・接続の指導計画から実践まで - 』朝倉書店他4冊に執筆、掲載されました。またこども園開園時からアトリエ活動が保育月刊誌に連載されています。2019年度には『こども園の一日』のDVD制作(新宿スタジオ)が行われました。

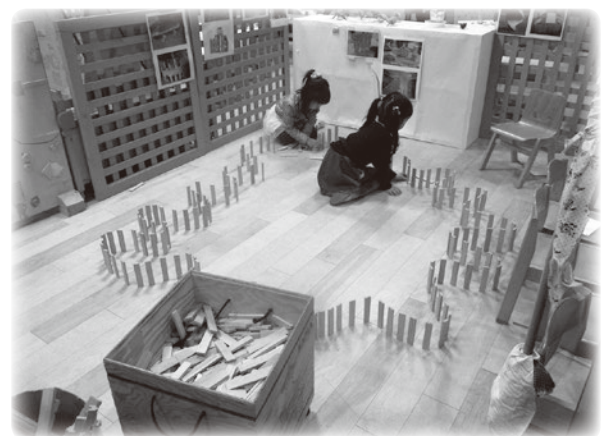
園内研修会

2016年から保育の質の向上を目指し、外部講師による園内研修会が毎月1回行われるようになりました。外部

講師に一日保育を見ていただき保育終了後に保育の振り返りを行いながら助言をいただきます。学年ごとのテーマに基づいた話し合いも活発に行われ、実践につなげていく循環と保育者間の対話が豊かになりました。現在(2020年)は本学教育学部の久保健太先生が担ってくださっています。

イタリア、レッジョエミリアへの幼児教育スタディーツアー

本園の特徴の一つであるアート活動はイタリアレッジョエミリアの幼児教育の教育観が土台にあります。さらに質の高い保育、充実した活動とするため、現地での研修システムを活用し先生方の研修派遣を行うことになりました。2017年度には3名の保育者と大学教員、2018年度には3名、2019年度には4名が現地スタディに参加し、国際センターでの講義と実技、乳幼児学校の視察など大変充実した研修と学びの機会になりました。2019年度には現地で「まねっこ遊び(乳児)自分だけの色(幼児) - その世界を楽しむ - 」のテーマで実践発表を行いました。体験した先生方の学びは大きく、本園の保育内容、環境、様々なかたちで生かされています。今後も質の高い保育を目指し、海外のスタディーツアーへの参加を促していきたいと思っています。



木の玩具(カプラ)で遊ぶ子どもたち

おもちゃインストラクター、木育インストラクター、保育ナチュラリスト資格取得

施設建設の折、保育室環境と乳児の玩具の学びのために訪れた東京おもちゃ美術館で、優れた玩具や木の温もり溢れる遊び環境に出会いました。本園が目指している保育環境と重なり、大きな影響を受けました。また、子どもの成長に欠かすことのできない玩具や子どもにとって優れた教育者ともいえる自然環境について学ぶ

機会として各講座の受講を推進しました。2016年度から2019年度までに、おもちゃインストラクター 6名、木育インストラクター 18名、保育ナチュラリスト17名が有資格者となりました。また、保育ナチュラリスト、木育インストラクター有資格者及び自然教育への取り組みが評価され、2019年度9月には「ウッドスタート宣言園」として認定されました。

これからも子どもたちの豊かな感性と学びにつながる自然環境の構築とそのための学びを継続していきたいと思います。

お父さんの会の存在

お父さんの会は幼稚園時代の「広場おりーぶ」から誕生しました。父親の子育て参加とパパ友の繋がりを目指しました。その後、2013年こども園となり、お父さんの会に井上寿先生(本園の設計者)や大学教員中津秀之先生に加わっていただき、活動の内容も『園の環境造り』になっていきました。園のコンセプトである『冒険遊び場のような園庭』造りをお父さんの会と園の先生たちで話し合い、力を合わせて作り上げています。先駆的な園の施設見学を井上先生と中津先生、お父さんの会のメンバーと先生たちで複数回行い、そこで得た情報や学びを本園の園庭に活かして、やぐら・山・ピオトープ・ピザ釜・太鼓橋・ブランコ・段々砂場などを造りました。今後も、子どもたちの遊ぶ姿に合わせて、お父さんの会と協働して進化していくことでしょう。また、室内環境の充実も今後の活動に取り入れたいと思っています。



園庭造り(お父さんの会)

創立70周年記念礼拝とコンサート

2019年11月30日、創立70周年を迎え、記念礼拝とコンサートが関東学院大学ベンネットホール(SCC館)で行わ



創立70周年記念礼拝

れました。関東学院教会幼稚園から始まり、本園を巣立っていった卒業生は5,300余名になります。これまでの園の歩みが、神さまに守られ導かれてきたことに深く感謝を捧げ、支えてくださった多くの関係者や保護者の方々にも感謝することができました。当日は、園児と保護者、現旧教職員、招待者を合わせて約600名が集いました。記念礼拝では山崎清美先生(元本園保育教諭、現在は牧師)が『愛はここに 있습니다』と題してメッセージをしてくださいました。また、在園児が『僕のこころのなか』を賛美し、年長クラスの子どもたちだけで『主われをあいす』(英語でも)を賛美しました。

記念コンサートでは、卒業生(1998年卒)の山田姉妹(双子のデュオでプロ歌手)が美しい歌声を聴かせてくださいました。子どもたちの良く知る賛美歌や歌と一緒に歌い、楽しい時を過ごした子どもたちは先輩の姿に憧れを抱いたことでしょう。山田姉妹だけでなく、本園を卒業していった子どもたち一人ひとりが自分の持っているタレントを発揮して輝いていてほしいと願い、祈ります。

また、70周年記念ムービーを写真家(本園の保護者)の方をお願いして作成しました。それを当日、会場の皆さんにご覧になっていただき、現在の園の歩みを知っていただきました。またその後、来賓の方々には園を見学していただきました。エントランスに植えた園のシンボルツリー(も



70周年記念事業にて植樹されたシンボルツリー

みの木)や園を訪れる方が憩える空間造りは70周年記念事業として行いました。

六浦こども園のこれから・・・

本園は、こども園となり今年で8年目を迎えました。今年度は、コロナ感染症という今までに経験したことのない試練の中で、当たり前のように行っていたことを一つひとつ見直す機会を与えられました。そこで、私たちが問われ続けているのは『何を変えて何を大事にするのか』ということです。園生活が子どもたちにとって、どのような意味や価値があるのかを再確認し、子どもの最善を願い求めていきたいと思っています。

私たちは、創立以来、子どもたちをありのままに受けとめ尊重するキリスト教保育を園の土台に据えています。そして、子どもたちが神さまからいただいているタラントを発揮して輝いていけるようにと祈りを持って保育を行ってきました。また、子どもたちが(先生たちも同様)自分は神さまに愛されている存在であるということを実感できる関わりや生活を大切にしています。これは、これからも変わらない私たちの保育の基として、継続し大切にしていきたいと思っています。

また、先生たちが研鑽を積んでいくことや研究発表を行い自分の保育の質を高めていくことができる環境作りも大切に継続していきます。先生たちが自分に与えられているタラントを発揮して、子ども理解や関係作りなどの学びを深め、これからの時代の保育を構築していけ

る保育者集団を目指していききたいと思います。私たちは、子どもたちが『なりたい自分』を見つけ実現しようとする時のサポートをしっかりと行っていきます。

本園の特長の一つでもある子どもたちの感性を豊かにして、表現する事を楽しみながら探求していくアート教育・保育の充実のためには、アトリエ活動に美術大学を卒業したプロのアトリエリストを配置し、環境を整えていきたいと思っています。アトリエリストから、私たち自身もたくさん学び、生活の中のアートを充実して、子どもたちと一緒に喜び楽しみたいと思っています。

これからの園行事や活動は、今まで以上に子どもたちの育ちにとって大切な経験となるように内容を吟味して計画をしていこうと思います。行事などに参加された保護者の方が子どもの育ちを感じられるように、参加の在り方を模索し工夫します。そして、その意味や価値を理解していただけるように努めます。また私たちは、保護者の方々と共に子どもの育ちを喜び分かち合える関係を大事にしていきたいです。

最後に「これからの時代を担っていく子どもたちが、しなやかな生きる力を持った人に育っていきますように」と心から神さまに祈ります。そして、こども園が子どもたちや保護者の方々にとっての心のふるさと(=懐かしくて温かくていつでも訪ねたくなる)となれるように、私たちは子どもたちと保護者との生活を大切に歩んで参ります。



70周年記念礼拝・コンサート 2019年11月30日

年 月 日		こ と が ら
1947年4月	(昭和22)	保育開始
1948年6月15日	(昭和23)	旧海軍航空技術廠工員養成所跡(浴場だった所)にて関東学院教会幼稚園開園(園児46名) ＜6月10日付で幼稚園認可申請書を提出、7月10日に神奈川県知事内山岩太郎から設置認可を受ける＞
1949年1月	(昭和24)	大学礼拝堂裏(現在の金沢八景キャンパス、大学7号館あたり)に移転 ＜その後、旧神高跡(現在の六浦中高体育館あたり)へ移転＞
1949年3月	(昭和24)	第1回卒業式を行う(卒業生36名)
1950年12月26日	(昭和25)	財団法人関東学院幼稚園となる
1951年2月15日	(昭和26)	学校法人関東学院幼稚園となる
1956年2月13日	(昭和31)	幼稚園舎として独立の建物が完成し移転する(鉄筋ブロック平屋建84.65坪、総工費342万円) (現在の金沢八景キャンパス大学、西門傍)
1957年10月18日	(昭和32)	*初めて園独自で運動会を行う(園庭にて)
1963年7月	(昭和38)	15周年記念としてホール(40坪、160万円)を増築、記念式典を行う
1965年4月	(昭和40)	園児増のため1教室増築する
1967年4月	(昭和42)	定員を160名に増やす
1968年1月30日	(昭和43)	創立20周年記念式典を行う 新園章、新園旗ができる(水船六洲先生デザイン)
1970年	(昭和45)	園児増のため更に1教室増築する 定員200名となる
1979年4月	(昭和54)	六浦小学校東端に新園舎完成、移転(鉄筋2階1部地下1階、1033.3平方メートル)
1980年9月	(昭和55)	3歳児保育を開始
1981年4月	(昭和56)	組織変更により関東学院女子短期大学付属幼稚園と名称変更する
1988年10月1日	(昭和63)	関東学院女子短期大学付属幼稚園創立40周年記念式(於：女子短大チャペル)
2003年4月	(平成15)	組織変更により関東学院六浦幼稚園と名称変更する
2004年4月	(平成16)	週1回園舎開放
2005年10月	(平成17)	「にんにん文庫」開始
2006年	(平成18)	預かり保育「ろばの子」開始 スクールカウンセラーによる子育て相談「すくすく」開始
2006年12月2日	(平成18)	つどいの広場事業 親と子の広場「おりーぶ」正式オープン
2009年6月27日	(平成21)	創立60周年記念バザー
2009年9月	(平成21)	「子どものアトリエ」開始
2009年11月21日	(平成21)	創立60周年記念礼拝・記念コンサート
2010年	(平成22)	「げんきず」開始
2011年	(平成23)	通園バス(京急バス委託)導入
2012年4月17日	(平成24)	六浦幼稚園認定こども園化に係る新棟建設工事 起工式
2013年3月30日	(平成25)	新園舎献堂式
2013年4月1日	(平成25)	関東学院六浦こども園開園(入園日)
2013年4月11日	(平成25)	関東学院六浦こども園第1回入園式
2013年4月	(平成25)	園章の変更 「お父さんの会」発足 自園の園バス2台で通園バス運行
2019年11月30日	(令和元)	創立70周年記念礼拝・記念コンサート

* 関東学院百年史には「1956(昭和31)年秋」とあるが、六浦幼稚園所有のアルバムで確認したところ、1956(昭和31)年の運動会は六浦中高の校庭で開催している。また、同アルバムには翌年の1957(昭和32)年10月18日に開催された運動会の写真もあり、「於 幼稚園庭」の記載があったため、今回の年表作成にあたってはこのアルバムの記録を根拠とした。

- ・建物等の名称は当時のまま。
- ・記載事項は六浦幼稚園所有資料、関東学院百年史、関東学院大学30年史、関東学院広報、関東学院学報、関東学院学院史資料室ニュース・レター等に拠る。

「関東学院におけるキリスト教教育の歴史—多様性の尊重と共生の観点から—」

関東学院大学名誉教授 元学院宗教主任 高野 進

2018年6月8日～9日に学校法人関東学院(関東学院大学金沢八景キャンパス ベンネットホール)で一般社団法人キリスト教学校教育同盟第106回定時総会が開催された。以下に掲載の文章は、その総会初日に特別プログラム講演として高野進先生が語られた講演内容である。

(1) 関東学院の沿革から

今から約34年前、1984年、学校法人 関東学院は100周年を迎えた。重症校であった大学紛争がやっと収束して、数年後、学校法人関東学院の理事会は、これまでの歴史をまとめる役割を、日本キリスト教史の研究者で、中学校高等学校(横浜三春台)の日本史教諭・本学にあった神学部の助教授を勤められた片子沢千代松に依頼した。散逸していた様々な資料の収集、さらに、複雑な編纂作業の結果、1032頁の分厚な『関東学院百年史』が、1984年に刊行された。(印刷所は神奈川新聞社であった。)関東学院の沿革を紹介するために、先ず同書の「あとがき」から始めることにしたい。そこに、関係者たちの複雑な事情と心情、その整理・調整のための骨折りの経過が記述されているからである。

「関東学院建学百年を迎えるにあたり、学院に関係する者全員が、建学の原点に立ちかえり、そこから新たな出発をすることは何よりも大切な、しかも意義あることではあるまいか、学院関係者を含めて大多数の人たちは、関東学院は1919(大正8)年1月27日の創立と思っている。しかもこの日に創立記念式典を行いつづけてきた。しかし式辞には必ず、関東学院の前身は東京学院であり、東京学院の前身は横浜バプテスト神学校であったとのべてきたのである。(中略)しかしよく学院の歴史を調べてみると、学院の源流は三つあり、第一の源流、横浜バプテスト神学校(のち日本バプテスト神学校となる)は、第二の源流東京学院に合流し、最後に第三の源流関東学院に合流していることが明らかであって、この間断絶したことがなく、百年間つづいているのである。そしてキリスト教精神を教育の基本とするという建学の精神が百年間貫いていたのである。百年史編集の



意図の主要目的は、この点にあるのである。」(『関東学院百年史』1028頁)

確かに、「関東学院」という名称は1919年に横浜に始まる。最初は「中学関東学院」として開設された。しかし、その背後には、上掲の記述にあるように、1884年、創立の横浜バプテスト神学校と、1895年、開設の東京中学院(後に中学部と高等部を併設した東京学院)があった。いずれも創設母体は、北部アメリカ・バプテスト教会である。「北部」とわざわざことわったのは、アメリカには「南部バプテスト派」と言う巨大な組織が別に存在するからである。

この北部アメリカ・バプテスト教会には、名称について多くの変遷がある。今日ではAmerican Baptist Churches,U.S.A.である。バプテスト諸派には、多くの群れがある。バプテスト派はもともと個別教会主義、典型的なVoluntaryism(任意寄付制度)に基づく。学校法人の定款を「寄付行為」と言うが、これも同じ背景を持つ。アメリカ合衆国は、憲法の修正条項により国教会制度も、州教会制度も持たないことになっている。それゆえキリスト教会は、それぞれ自発的な任意寄付制度によって形成され、運営されてきた。

「任意」というと消極的だが、むしろバプテスト教会は「自発」に基づく活動である。今日、ヨーロッパの諸教会が停滞気味なのに対して、アメリカの諸教会が今なお盛んなのは、この自発主義に基づくからである。これは哲学用語のVoluntarism(意志主義、主意説)とは異なる。北部バプテスト派の人たちは、カルヴァンの

神学に立っていたが、教区制度に束縛されず、自発的で、宣教志向を持った人たち(mission people)であった。

英国バプテストには、ウィリアム・ケアリー(1761-1834)がいた。彼は19世紀の「偉大なる宣教の世紀」(イエール大学の宣教学者 K.ラトゥレット)の先駆けとなったので、しばしば「近代宣教の父」と呼ばれることがある。このケアリーのインドにおける宣教活動の感化を受けて、アメリカの有能な若者たちが外国宣教に志願した。アメリカにおける最初の派遣団体は、会衆派のthe American Board of Commissioners for Foreign Missionsであった、アドナイラム・ジャドソン(1788-1850)とルーサー・ライス(1783-1836)は、福音宣教にあたり、宣教地では信仰者のバプテスマの重要性を認識して、バプテスト派の立場に立ったために、アメリカン・ボードを離脱した。彼らを支援するために、急きょ、個別教会主義をとっていた、ゆるやかな連合体しか形成していなかったアメリカ・バプテスト諸教会の代表が、1814年にフィラデルフィアに集まって、the General Missionary Convention of the Baptist Denomination in the United States for Foreign Missions (通称、「3年1度の大会」、the Triennial Convention)を組織した。その後、1845年にthe American Baptist Missionary Union、1907年にthe Northern Baptist Convention、1950年にthe American Baptist Convention、1972年にthe American Baptist Churches in the U.S.A.と名称を変えた。

このような様々な名称の変遷の後、今日では、アメリカ・バプテスト教会国際宣教部(BIM)という名称のもとで活動が続けられている。今日でも、学校法人 関東学院は、アメリカ・バプテスト教会からの理事と監事を受け入れており、精神的・人的な交流を続けている。

ここで、関東学院の沿革に戻ることにしたい。1966(昭和41)年5月17日に、横浜文化体育館において、関東学院「開学80周年」記念式が行われた。

1974年は、開学90周年記念の年であったが、正式な式典は行われなかった。そのかわりに、「関東学院の源流をさぐる」と題して、片子沢千代松が六浦キャンパスを会場に講演を行った。この講演では、関東学院の沿革をめぐる理解の相違を調停する説明の努力が講じられた。つまり関東学院には三つの源流があって、それらが合流して、関東学院になったことを明らかにしたわけである。以下はその沿革をたどる。

(2)横浜バプテスト神学校



横浜バプテスト神学校

この学校は1884(明治17)年、横浜山手に始まった。その発祥の地、横浜山手64番地の近くに、現在はこれを記念する銘板が設置されている。この神学校を設立することを提案し、初代校長に任命されたのは、アルパート・アーノルド・ベンネット(1849-1909)であった。彼はブラウン大学を卒業後、バプテスト・ユニオン神学大学院(シカゴ大学の前身)に学んだ。彼は伝道者志望の若者を自宅に招いて指導した。このクラスの活動の実績を基盤として、彼は、在日アメリカ・バプテスト宣教師会で神学校開設の承認を取り付けた。そして次にアメリカのミッション本部に支援を要請した。近代化を推進した明治政府は、1872(明治5)年8月3日にいわゆる「学制」(近代教育制度)を公布した。しかし明治政府は近代教育推進のために十分な財政基盤を持っていなかったとされる。神学校に入学する学生は様々な背景を持っていた。横浜バプテスト神学校は、この若者たちに心血を注いで、聖書と神学の専門教育を行って、有為な伝道者を育て上げた。

初代校長で、中心的教授であったベンネットに注目したい。ベンネットは、もともとcivic-minded(社会福祉に関心のある)人物であった。フィラデルフィアにおける青少年期には、身体の不自由な人や、老人を慰問し、恵まれないアフリカ系アメリカ人の子どもたちのための教会学校に奉仕した。横浜では、外国人居留地の病院をしばしば見舞っていた。異郷に住んで身寄りのない病人のために、寝ずの看病をしたこともしばしばであったという。1896(明治29)年6月に襲った三陸津波では、日本国内の外国人から集めた義捐金や、救援物資を携えて、彼自身で被災地に駆けつけ、約一ヶ月滞在し、直接に救援活動に従事したほどであった。

メーラ夫人のまとめた伝記(A SKETCH OF THE LIFE AND CHARACTER OF Albert Arnold

Bennett, D. D. 多田貞三訳『素描 アルバートアーノルド ベンネット その生涯と人物』には、ベンネットの生き方のモットーは「汝のもっと近くにある義務を成せ」であった。これはもともとトーマス・カーライル著『衣裳哲学』(Sartor Resartus)からの引用である。遡れば、この言葉はゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』に由来するとされる。英文ではこうなっている。Do the Duty which lies nearest thee.実はDutyという英語の単語は、今では「責務」「義務」と理解されて、必ずしも歓迎されないかもしれない。しかしその意味はもともと「本分、道徳上・法律上の義務、義理、本務、道義」である。ベンネットはこれをキリスト者としての「つとめ」「奉仕」(ministry; service)と受けとめていた。身近なところの、彼にとっては当たり前の、自然な奉仕を彼は喜んで実践したのである。

それゆえ、彼の友人たちは、横浜外国人墓地に設けられた彼の墓石に、こう刻んだ。He Lived to Serve.「彼は仕えるために、生きた」(多田貞三訳)。あるいは「彼は生きて、(神と人々に)仕えた」とも訳すことができる。これは関東学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」の「伏線」と言えないだろうか。

ベンネットが作詞し、メーラ夫人が作曲した讃美歌が残っている。現行『讃美歌』では48番、『讃美歌21』では496番に掲載されている。川端純四郎がまとめた「さんびかものがたりシリーズ」第V『平和の道具と』(2011年)の中で、この曲と作詞者、ベンネットをかなり詳しく取り上げてくれている。この曲は「礼拝 夕」の項目に入っているの、学校の午前中の礼拝でも、教会の午前礼拝でも、歌われることはないのは残念である。

原題の"Twilight"は、日没後の「たそがれどき」を意味する。これは同時に「人生のたそがれ時」、晩年とも解釈することができる。1931年版の『讃美歌』に掲載された歌詞を紹介したい。ベンネットの人柄と生き方がよく反映されている。

『讃美歌 34番』

1. しづけきゆふべの しらべによせて
うたはせたまへ ちちなる神よ
2. 日かげもやすらふ ころにしあれば
父にぞゆだねん けふまきしたねを
3. みにくきものの いろもかたちも
みえずなりゆく ときは来にけり

4. 日ごとわがなす あいのわざをも
ひとにしらさず かくしたまひね
5. とりはねぐらに ひとの家路に
かへるゆふべこそ いとしづかなれ
6. 神よこの世の たびぢをはらば
わがふるさとに いこはせたまへ



ベンネットが編集した
『基督教讃美歌』

ベンネットの奉仕の生涯を歌っている讃美歌がある。作詞者は、藤本伝吉である。この藤本は、戦前の捜真女学校と関東学院中学部で国語と漢文を教えた先生で、讃美歌作家であった。作曲者は不明。実は、藤本伝吉はベンネットからバプテスマを受けた。藤本は、213番のほか、210番、372番、433番も作詞している。

『讃美歌 213番』

1. みどりの牧場に 我らを臥さしめ
いこいの水際に 我らをみちびく そのこえ。
(おりかえし)
神のひとよ、かみのひとよ、みめぐみ永久にあれや。
2. 人足たえたる 荒野のはらにも、まよえる羊を
子のごと尋ねる そのこえ。
3. わが主の御影の 見えわかぬ時も、さやかに御旨を
我らにさとすは、そのこえ。

この讃美歌は「教会 宣教者」の項目に入っている。宣教者を「神のひと」と表現する。1節でも、2節でも、「神のひと」は、やさしい羊飼いの役割をはたしている。「我らを臥さしめ」「我らをみちびく」「まよえる羊を」「子のごと尋ねる」。この「子のごと」は自分の子のように愛しているのである。「我ら」を守り、導く羊飼いの、教師であるベンネットが描かれている。ある人たちは、これを人間賛美ではないかという。この宣教者は「よき羊飼いのイエス・キリストにならば」、仕える「神のひと」である。3節では、「見えわかぬ時」とある。迷う我らに「神のひと」

は「御旨」をやさしく説いてくださる。この「神のひと」は一貫して主イエス・キリストを証し、仕えている。

(3) 東京学院



東京学院

北部のアメリカ・バプテストは、日本においては、他の主要教派に比べて男子の中等及び高等教育事業を始めることが遅かった。1895年になって、E.W.クレメントが派遣されて来た。クレメントはシカゴ大学の出身で、旧制の水戸中学で教えたことがある。1895年9月に東京中学院(英語名はTokyo Baptist Academy、後にDuncan Academyに名称変更)は、東京築地の明石町に始まった。今はその学校のあった場所の近くの道路際に、記念碑が建てられている。この学校は1899年9月に牛込左内町に移転した。少数精鋭主義の路線を進めていた。札幌農学校第一期生の渡瀬寅次郎が校長を務めた。中心的な教師であったE.W.クレメント(1860-1941)は、もともと教師をしていた母親と共に、献身的に学生たちの世話をし、教育にあたった。クレメントは、後に旧制第一高等学校英語教師になっている。

北部アメリカ・バプテストは、日本において影響力を強めるために、拡大路線をとる経営方針に転換を迫られた。この時期に東京学院の理事長を務めたのは、C.B.テンネーであった。テンネーのもとで、1917年3月に、まず東京学院中学部が閉鎖された。次に新しい展望のもとで、1919年に横浜に拠点を移して、中学関東学院を開設した。後に旧制の専門学校であった東京学院高等学部と神学部が1927年に財団法人 関東学院に併合された。

東京学院の校訓は「勤めて怠らず、心を熱くし、主につかへよ」(文語訳 ローマ書12章11節)であっ

た。当時は英語による授業が行われていたので、校訓も英語で表現されていた。一般に普及していたKing James Version (1611年)では、Not slothful in business; fervent in spirit; serving the Lord.あるいは、In diligence not slothful; fervent in spirit; serving the Lord. (1881年改訂版)という表現もある。ローマ人への手紙12章はキリスト者の倫理・実践が述べられている。特に12章11節はピューリタンの間ではよく引用されていた御言葉であった。東京学院において、12章11節が掲げられたのは、学校の精神として、「篤き信仰と、誠実な日常の務めの実践」を学生に教えたかったのであろう。また社会に対しては、これが学校としての信頼を獲得するために、明確な旗じるしを示したことになる。Not slothfulは怠惰をいましめ、勤勉を奨励する。businessは、今日のような実業や、商売の意味ではなく、「なすべき つとめ」と理解される。日常のなすべきつとめを誠実に、勤勉に果しなさいという。文語訳の表現では、「ひたすら主に仕えよ」が中心と受けとめられそうである。しかし英文からは、前半Not slothful; fervent in spiritが掲げられ、日常的な心を込めた務めの実践、熱き心、そしてserving the Lord主に仕えることが掲げられている。両方が併置されている。Slothは「怠惰」「ものぐさ」「無精」lazinessの意味である。昔から「7つの大罪」の一つとされる。ピューリタンたちは「怠惰」をいましめ、「勤勉」(industry)を奨励した。この聖書の言葉は、後の「人になれ 奉仕せよ」に至る伏線と理解できる。

坂田祐は、1919年、中学関東学院の開設時の学院長であった。横浜に移り、男子中等学校教育を推進することになったが、必ずしも順風満帆ではなかった。1923年、関東大震災のために、竣工したばかりの校舎の大半が壊滅した。第二次世界大戦でも、横浜大空襲のために、大きな損害を被った。戦後においても、その焼け跡からの復興の道はまことに多難であった。1919年から1965年までの46年間、坂田祐は自ら陣頭指揮にあたり、大きな感化を残した。実は、この坂田は、先ずこの東京学院に学んでいる。その後、その教師となった。東京学院と関東学院のつながりの糸をここにもたどることができる。

坂田祐は、1902(明治35)年、馬術教官として市ヶ谷の陸軍士官学校に勤務していた。その裏門近くに、



学院長 坂田祐

1899年に東京学院が築地から移転して来た。当時は牛込左内町で、坂田は敷地内のヘンリー・タッピングの宣教師館で行われていたバイブルクラスに出席した。ここで、坂田はキリスト教信仰を持つことになった。坂田は除隊後、一時期、東京学院中学部に在籍したが、日露戦争に召集されて、その学びは途切れた。しかし日露戦争が終わって、再び東京学院に入り直して、中学の卒業資格を得て、第一高等学校に入学している、第一高等学校在学中は、東京学院学生寮の舎監として続けて関わった。

この馬術教官の時期に、坂田祐が重要な信仰体験をしている。坂田は『恩寵の生涯』の中では記していないが、タッピングの奥様がお嬢さんのヘレンにそのことを伝えている。ヘレンは、後に賀川豊彦の秘書を務めた。彼女はこう書き残した。

「父親のタッピングは、今日、関東学院となっている東京学院男子中学校を設立した。この学校は西欧の方式にならって設立された、おそらく日本で最良の学校であったであろう。父は、近隣の形成期の諸学校の教師のために、英語バイブルクラスを開講していた。この教師たちのバイブルクラスに陸軍士官学校から一人の教師が出席していた。若い坂田祐は、貧しい小作農の子弟であった。彼は苦学の末、優等生として天皇から銀時計を賜ったほどの努力家である。20代の初めに、彼はこの学校の教官となっていて、将来を嘱望されていた。

しかし英語のバイブルクラスにおいて、彼は次の聖書の言葉に遭遇した。『父よ、彼らを赦し給へ、その為す所を知らざればなり』(ルカ23:34)。「Father, forgive them; for they know not what they do.」彼はこの言葉を何度も読んでもらい、心にその意味が沁み込むように聞いていた。それは新しい言葉に盛られた新しい思想として響いたようだ。彼は不思議に思いつつ、こう言った。『強い人間の持つべ

き徳として、ゆるしを聞いたことがない。それは女性の弱さとして示されてきたものである』と。その晩、バイブルクラスの後、彼は、父、タッピングとの相談と祈りのために残り、キリストに生涯を捧げることを決心した。」

坂田(旧姓 中村)祐は、会津藩士の子孫として生まれた。佐幕派であった会津藩は戊辰戦争に敗れて、23万石がたった3万石に減じられて、本州の北の果て、下北半島の陸奥斗南に移封された。どんなにかきびしい冬を何度も過ごしたことであろう。やがて明治維新を迎えて、会津藩士であった者の中には、北海道に屯田兵となって移住した者も多い。中村家は陸伝いに十和田湖の南、秋田県鹿角郡大湯に移り住んだ。山奥の草深い不便な土地で、親たちは鉱山で働いて、やっとのことで生きのびた。明治維新の時代になっても、会津藩士の子孫たちは、薩長支配政治のもとで「朝敵」として冷遇されていた。若い祐青年にも、明治維新の出世街道から外されてしまった「恨み」に近い、やるせない、寂然としない、取り残された気持ちの心の片隅にあったのであろう。しかし主イエスの十字架上のゆるしの言葉が若い祐青年の心を解放にした。その後も、坂田は、いと小さき、弱い、不遇な人たちへの深い思いやり、やさしさを持ち続けていた。



関東学院最初の建物

(4) 関東学院

1919(大正8)年、坂田祐は中学関東学院学院長として先頭に立って学校開設のために日夜粉骨砕身した。1919年4月9日、中学関東学院の入学式が行われた。この時に、坂田祐は校訓「人になれ 奉仕せよ」を初めて訓示した。坂田祐は自伝『恩寵の生涯』にこう記している。

「私は式辞にキリスト教の精神を高調して建学の精神とし、これを具体的に表現するために『人になれ』と力説した。これは私が祈って上から示された言葉であった。『…諸子は将来学者になり、教育家になり、

実業家になり、政治家になり、弁護士になり、医者になり、軍人になり…になるであろうが、何者かになる前に、先ず人にならなければならない。…」と強調した。

次に述べたことは『奉仕せよ』であった。人のために、社会のために、国のために、人類のために尽くすことであると力説した。爾来キリスト教の精神をもって本学院建学の精神とし、これを具体的に表現するために『人になれ』『奉仕せよ』の二つの言葉を校訓として、機会ある毎にこれを強調して今日に至ったのである。

キリストの教訓をもって人たるの人格をみがき、キリストの愛の精神をもって奉仕することである。』（『恩寵の生涯』76頁）

坂田祐はこの校訓を「祈って、上から示された」という。その背景には、既に引用したA.A.ベンネットの生き方や、その墓碑「He Lived to Serve.」があり、東京学院の校訓「Not slothful in business; fervent in spirit; serving the Lord.」などがある。

旧制中学第4回卒業生で、後に大阪大学教授となった森東吾は、内村鑑三が『後世への最大遺物』において説く「勇ましい高尚な生涯」を「人になれ」「奉仕せよ」というふうパラフレーズして、教えられたと言う（追悼講演「坂田祐先生の人と教育理念」）。坂田祐はこの校訓を学生たちに訓示したばかりでなく、自らそれを生涯かけて実践し、率先示範した。このことの関連で、鈴木範久は内村鑑三の『後世への最大遺物』教訓の実践者のひとりとして坂田祐を取り上げている。（私共もこれとの関連で取り上げて論文としたものを、本学のキリスト教と文化研究所所報第14号に掲載している。ご参考になれば幸いである。）

(5) 関東学院セツルメント(1928-1937)

同じ時期に、東京大学のセツルメント活動が行われた。またキリスト教会は隣保事業や、社会館活動を推進した。ここで関東学院の旧制専門学校の活動として、教授たちと学生たちによる活動に注目したい。

1927年に東京学院の旧制専門部が関東学院に移設された。その高等学部社会事業科(後に社会事業部と改称)(英語名the department of social service administration)は、キリスト教信仰とその実践という課題を担って、約10年に渡って活動が行われた。これ



指導者友井楨教授と
地域の子どもたち

は今日の言い方では、service-learningの先駆けであった。現場で学生を訓練し、また社会実践を行って、片隅の極貧の人たちの自立を支援する企てであった。

この活動は、当初、横浜市南区三春台にあった関東学院のキャンパス、今は中学校高等学校と小学校があるところ、横浜市南区三春台4番地の近く

の、南太田町庚耕地、「俗称、乞食谷戸、約200戸」と呼ばれたところで開始された。そこは丘の上にある学校の坂下であり、足元から始まったことになる。ここは、1923年9月1日に襲った関東大震災後に、最も貧しい人たちが、吹き溜まりのように集まって、肩を寄せ合って住んでいた。しかしやがて横浜市の方針により、長屋の住宅が撤去され、そこに住んでいた人たちは他の地域に移されてしまった。

次に、関東学院セツルメントは京浜工業地帯の一角、横浜市神奈川区神奈川通り9丁目に活動拠点を移した。ここは、JR線と京浜急行線が並行して走る線路と、第一京浜国道の間の細長い土地である。当時、この場所には、神奈川区や鶴見区の町工場で働く下層労働者と日雇い労働者が住んでいた。「トンネル長屋」といわれる住宅が幾棟も並んで建っていた。各部屋は板で仕切られ、一部屋ごとに一家族が住んでいた。共同炊事場があったが、それぞれの部屋の住民は、軒下を炊事場に使っていた。住民たちは近くの廃棄物捨て場から石炭が



歌の練習風景



土曜学校における衛生状態改善を目的とした歯磨き指導

ラを拾ってきて、七輪で調理していた。

関東学院セツルメントは、このトンネル長屋の一部屋を借りて、ここで再出発した。何人かの学生がそこに住み込んだ。ここを拠点に、子供会、日曜学校、婦人会、労働学校が開かれた。この活動の指導者は渡部一高教授であった。やがて手ごろな空き地500平方メートルの土地を借地できたので、約165平方メートルの木造平屋の会館を建てた。会館の名称は「前進館」と付けられた。

「関東学院セツルメント」案内書にはこう書かれている。今日から見れば、まことに粗削りの文章であるが、熱意がこもっており、歴史的な資料であるので、そのまま紹介したい。

「理論と実践、信仰と行為、これらの対立が若き青年学徒の現身中に挙揚されて一つの生きた統一となったのが我々のセツルメントである。実践の伴わぬ理論は空虚であり理論なき実践は盲目であると信ずると共に、我々は行為の伴わぬ信仰は死にしもの、信仰を欠く行為は無意義なものであると確信する。故に両者の不可分性を叫び其の完全なる一致を闘い取らんとする我々は一方においては、純情の焰にきよめられ、他方においては氷の如き理性に導かれて、ひたすら、隠れた見えない努力を続けて行く。これは単なる感情でもなく、手段でもない。それは厳然として、我々に迫る至上命令であり、おごそかに響く神の声である。」(原文旧字体)(案内書「関東学院セツルメント」)

その活動方針は平易な英文で表現されていた。

OUR FIVE PRINCIPLES:

1. Not alms, but friends.
2. Not to invite, but to go.
3. Every activity educational.
4. The center not in an office but on the field.
5. Work without enthusiasm and an ideal is vain.

後の印刷物では、第4の項目が消えて、第5が繰り上がり、次の文が第5として入れられた。

5. Character renovation through applied religion.

これは「人になれ 奉仕せよ」の言い換えではないだろうか。

彼らの活動の原則をさらにもう少し吟味したい。

Not alms, but friends.

このalmsは「施し、喜捨、施し物」の意味で、ギリシア語の語源「エレーモスネー」で、「あわれみ」の意味である。上からの慈善を施すことではなく、「友、仲間」となろうという。

Not to invite, but to go.

アプローチとして、人々を招くのでなく、こちらから出向く姿勢を持つべきであるとする。

もともと「セツルメント」のsettleとは「移住する」という意味である。

Every activity educational.

この活動が社会改革に至るべき大きな目標があるとしても、まずは学生にとっても、そこに住む人々にとっても、「教育的」でなければならないとする。各人の人間性の形成が課題であったとする。

The center not in an office but on the field.

学校の研究室ではなく、現場が中心でなければならないとする。この項目は後の印刷物からは消えている。方針が変更されたのではなく、他の項目にも、背後に、これが示されているとしたのであろう。

Work without enthusiasm and an ideal is vain.

Enthusiasmは「熱意、熱狂、燃えるような感激」を意味する。このような活動は心に燃えるものがなくては続かないであろう。東京学院の校訓の一部“fervent in

spirit”がここに生かされている。

Character renovation through applied religion.

Characterは「品格、品性、人格」を意味する。人間性は、法律・社会制度・権力・科学によって容易に変えられない。キリスト教の実践による具体化によってのみ、人間性の変革が可能であるとする。これらの原則は、確かに関東学院の建学の精神と校訓に沿っていたことがわかる。

当時の関東学院理事長を務めていたC.B.テンネー(1871-1936)先生は、ウォルター・ラウシェンブッシュ(1861-1918)が教えていたロチェスター神学大学院で学んだ。テンネーは、関東学院セツルメントを紹介する英文を書き残している。ウォルター・ラウシェンブッシュがニューヨーク市のために祈った「社会的に目覚めるための祈り」を、テンネーは横浜市のための祈りとして、そのまま引用して、祈っている。その一部を紹介したい。

「神さま、私たちが大好きで、自慢のできるこの町のために祈ります。…」

私たちの町を、共に力を合わせることできる所とするために、お助けください。誰もが自分の居場所と役割を見つけることができ、毎日、それぞれの生活を築き上げ、不屈の人として、技能と知性をもって、最善を尽くそう、と熱望することができるようにしてください。この町の人たちが、家庭を広く開放し、そこで、すべての人たちが安らかに、不安のない生活を送ることができ、穏やかに愛する人々と睦み合い、健やかに歳を重ねることができるようにしてください。…」

正義の行われる町をつくろうという幻を与えてください。誰もが他の人々を搾取することのない、公義が行われる町、悪徳と貧困が人々を苦しめることのない豊かな町、人々に奉仕することが高く評価され、高潔さが重んじられる、友愛にあふれた町、権力によって強制されるのではなく、すべての人々への愛に基づいて、秩序が保たれるような平和な町、すべての人たちが生きがいと幸福にあずかることのできる町をつくることができますように。

主なる神よ、私たちの心の中にある言葉にならない祈りをお聞きください。この町に美しさと公正さが一日も早く実現するために、私たちが自分たちの

時間と力と思いを捧げることを誓いますから。」

ラウシェンブッシュの『キリスト教と社会的危機』の初版が1907年に出版された。戦前の関東学院神学部教授であった友井楨が1923年にこの邦訳を出版した。実は110年後、『21世紀におけるキリスト教と社会的危機』と題して、この著作が今日の研究者たちによるコメント付きで新たに世に出版されている。この問題は今なお未解決な課題なのである。

この関東学院セツルメント活動は、1928年から1937年まで9年間続いた。時代は軍国主義に向かっていた。社会の貧困や抑圧について論じ、貧しい人々の救済活動に関わることで自体が、社会主義活動とみなされて、官憲の弾圧の対象になった。このためセツルメントに関わったすべての学生たちが逮捕され、拘留・きびしい取り調べを受けた。とうとう関東学院高等部の社会事業部は1932年に閉鎖を余儀なくされた。神学部も1937年に閉鎖された。

そのセツルメント活動の閉鎖を告げる挨拶文が残っている。

「(前略)昭和初期より今日までのあらゆる社会的暴風雨の中にあつて、我々の為めの精神的道場であり理論的実験室であつたこの懐しいセツルメントが其の姿を消すという事は、地区の人々にとってというよりはむしろ我々職員にとって非常な打撃で御座います。

しかし我々は少しも後悔しておりません。過去10年間の仕事が輝かしい結果を生んだからというのでは無く、その成功と失敗の一つ一つがすべて真剣な努力であり闘いであつたという誇りと喜びとがあるからであります。

我々が播いた種が一度地におちて死ぬのであります。

しかし其の死によって、より高度な発展が約束せられ、何時かは其が30倍60倍になって刈り取られる時が必ず来るという確信をもって看板を下すので御座います。(後略)」(原文旧字体)

この活動は約10年間にすぎなかったが、机上や、研究室における議論、教場での講義を越えて、教授たちと学生たちが「人になれ 奉仕せよ」の社会実践をしたことを高く評価することができる。

まとめ

キリスト教学校教育同盟加盟の諸学校は、いろいろな表現を用いているが、自分たちの校訓・建学の精神として、学びの意義と、他者への愛・他者への奉仕への訴えと使命を掲げている。それが外に対して、社会に対して、自分たちの存在理由・存在価値・使命を示すことである。と同時に、内側の教師・職員をまとめる原理である。さらに、そこに集う学生・生徒たちに、学びの方向付けを与えている。

今年(2018年)は明治維新150年とされている。キリスト教学校は、その間、冬の時代、春の時代など経験した。今はどんな時代であろうか。地の塩、世の光としての貢献をしているであろうか。キリスト教が掲げる生命の尊重、人間の平等、隣人愛、信教の自由、世界平和、自然保護、人類の共存の課題は、キリスト教学校を通して実現へと向かっているのだろうか。

最後にもう一度、坂田祐の掲げた、校訓「人になれ奉仕せよ」に戻ることにしたい。

1919年4月9日に第一回入学式を行って、校訓を訓辞した。その5年後、1924年3月10日、初めて手塩にかけた卒業生を出すことになった。その時の式辞が残っている。

「5年前、諸子の入学式に於て、私はわが学院の教育方針、その主眼とするところ、そのモットーを述べたのであった。それは先ず第一に『人になれ』という事であった。これと共に『奉仕せよ』ということであった。即ち立派な人となって、人のため社会のために尽すことである。人になれということと、奉仕せよということとは、離すべからざることで、吾人の徳は奉仕によって磨かれるのである。わが学院の標榜するところはこの点である。そして今もなお常にこれを強調している学院建学の精神である。これは学院が存在する限り主張さるべきものである。私はこの目標の下に、同僚の教員諸君と共に全力を尽くして来たが、徳足らず、力足らず実に貧弱なものであった。われわれ教員は、範を諸子の前に垂れなければならないのであるが、自ら不完全極まる貧弱さを以て、到底それはできないことである。唯自分以上、自然以上の力に信頼する外はない。ここに於て宗教的希望となり祈りとなるのである。私は祈りなくして諸子の前に立つことができなかった。人に



中学関東学院第一回卒業式 1924年3月

なること即ち人格を完成することは、いかに難しいかなである。しかし実現が極めて困難であっても、その理想に向ってなされる不断的努力そのものに価値があるのである。私は諸子に、この理想によって努力するようすすめて来たのであった。これは諸子が全生涯を通して、その実現に努力すべきものである。

上級学校に入学できないでもよろしい。貧乏になってもよろしい。この世の事業に失敗してもよろしい。諸子が自分の人生観の基礎を確立して、価値ある生涯を送ることができたなら、それは真の成功である。ここに理想を置いて真の奉仕ができるのである。奉仕とは自分以外のもののために尽すことである。それは君に対しては忠、国に対しては愛国…となるのであるが、その最大なるものは『人その友のために命を捨つる、これより大なる愛はなし』(ヨハネ15:13)である。これは愛の極致である。わが日本に於ては国家に奉仕する忠君愛国の勇者は少くないが、人道上の偉人は極めて少ない。かのモロカイ島の癩病患者のために一生をささげて奉仕せる人、身は英国の貴族に生れながら妙齢にしてわが日本に來り、熊本に癩病院を建ててあわれむべき病者のためにその生涯をささげている人、暗黒アフリカの土人にキリストの福音を伝えるためにその生涯をささげている人、これらの人々は人道の偉人である。

わが国は戦争に勝つことを以て世界に誇っているが、武力では世界文化に貢献することはできない。人道上の貢献もできない。願わくばわが国に人道上のチャンピオンが生れることである。願わくば諸子自らそのチャンピオンとなれ。関東学院の兵隊山から人道の兵士、諸子の帽章の橄欖が象徴する平和の戦士が多く出づることを願って止まない次第である。】(『新編 恩寵の生涯』110-112頁)

ここに、教育者、坂田祐の誠実さ・謙虚さがよく表れている。「人道上の偉人」たちについては、坂田自身が感動し、修身科の授業や、礼拝の席上でたびたび紹介したのであろう。ここではいちいち名前が挙げられていないが、「かのモロカイ島の癲病患者のために一生を捧げて奉仕せる人」とは、ダミアン(1840-1889)神父とその後継者のことを言っている。「熊本に癲病院を建てて…生涯を捧げている人」とは、ハンナ・リデル(1855-1932)とその姪、エダ・ハンナ・ライト(1870-1950)のことである。また「アフリカにキリストの福音を伝えるために生涯を捧げている人」とは、アルバート・シュヴァイツァー(1875-1965)、南アフリカ宣教の開拓者、ロバート・モファット(1795-1883)、宣教師・探検家デイヴィッド・リヴィングストン(1813-1873)たちのことを指している。

「それは君に対しては忠、国に対しては愛国…となるのであるが」と坂田は言う。彼は自身の立身出世を夢見たこともあり、一家の再興、親孝行、忠君、愛国を目指したが、今はそれから解放されている。旧軍人として、当時こう述べることは勇気のいることであった。「わが日本に於ては国家に奉仕する忠君愛国者は少くないが、人道上の偉人は極めて少ない」「わが国は戦争に勝つことを以て世界に誇っているが、武力では世界文化に貢献することはできない。人道上の貢献もできない」。三春台のキャンパスは、以前は兵隊の訓練施設であった。昔の人たちはここを「兵隊山」と呼んでいた。坂田はこれを意識してこう訴える。「関東学院の兵隊山から人道の兵士、…平和の戦士が多く出づることを願って止まない次第である」。坂田にはこの心の願いがあったので、横浜には多くのキリスト教学校があるが、第二次大戦中、キリスト教学校として存続できたのは「坂田先生のおかげです」と、戦前から戦後にかけてキリスト教学校の校長をなさった方が、ある席上でそっとわたしに話してくれたことがある。

坂田祐は元軍人として青年期をスタートした。しかし他の若者たちより12年遠回りして、発奮して、数え年30歳で、東京学院中学部4年に編入、あらゆる障害を克服して、受験勉強の末、31歳で第一高等学校に入学、34歳で同校を卒業、東京帝国大学に入学、37歳で同校を卒業した。

告辞の中で、「上級学校に入学できないでもよろしい」と言うが、坂田自身は遅れてであるが、上級学校に入学した。入学試験に失敗したか、経済的理由からか、

ここではわからないが、進学できない者もいたのであろう。関東大震災の直後であったので、これまでの生活の基盤をすべて失った若者たちも多かったであろう。坂田は、これまでの拠り所・価値観を転換することを助言している。「諸子が自分の人生観の基礎を確立して、価値ある生涯を送ることができたら、それは真の成功である」と言う。

坂田祐の人格に触れた若者たちは、坂田の言葉を忘れている。坂田は年を重ねても、背筋のまっすぐな古武士の雰囲気醸していた。しかも心優しい人であった。戦前の関東学院には旧制の公立中学校で入学許可されなかった身体の不自由な学生を受け入れて、同等の教育を受けさせた。戦後、坂田は関東学院の予算項目に「奉仕基金」を設けた。自分を含めて全教職員から少額であったが、給与から天引きした。これは1990年頃まで存続した。その基金は、まず沖縄のパプテスト諸教会に送られた。坂田は戦後の沖縄に深い負い目を感じていたので、何らかの手を差し伸べたかったであろう。また卒業生が牧師になる勉強を始めると、彼らを経済的に支援した。伝道所を開設した場合、家賃や、活動費を援助した。その点で、坂田は細かな配慮ができる人であった。人生を迂回して生きた坂田が自ら「人になれ 奉仕せよ」を自ら率先して実行したのであった。

こんなエピソードがある。ある人が関東学院を訪ねてきた。校庭の片隅で木を黙々と植えている人がいたので、用務員と間違えて、その人は「坂田先生はどこにおられますか」と声をかけた。実は坂田がやっていた。木を植えた人と言う話があるが、将来の希望をもって今なすべきことを、地味に行くことを着実に進める生き方がここにあるのではないか。

(原文を一部書き改めた部分があります。)



学院長メッセージ

関東学院 学院長 松田 和憲

『新型コロナウイルス禍における連帯への呼びかけ』

この度、新型コロナウイルスによって、有形無形の影響を受けたすべての方々に対して、心からお見舞いを申し上げます。また、命を亡くされた方々、及び、遺族の方々の上に、神からの慰めと平安をお祈りいたします。新型コロナウイルス感染症が世界中に拡がり、数多くの死者が発生し、今尚猛威を振っていることなど、果たして二ヶ月前に、誰が予測したことでしょうか。日本においても緊急事態宣言が発令されても、いまだ先の見えない状況が続き、多くの人々は不安と困惑の日々を過ごしています。そうした中、関東学院学院長として、学院に連なるすべての方々に、忍耐の時を共有し、共に連帯していきたいとの願いを込めて、このメッセージを発信させていただくことに致しました。

まず、学院のこども園、小学校、中学高等学校、大学にそれぞれ入園・入学された皆さん、及び、保護者の方々に対して、お慶びと歓迎の意を表したいと思います。一連の事情で変則的な形で皆さんをお迎えすることになりましたが、喜んでお迎えする気持ちには変わりはなく一時でも早い収束を願うばかりです。

世界の歴史を振り返るとき、人類はパンデミック(世界的流行病)を何回も経験しました。中でも14世紀にアジアからヨーロッパで起こった黒死病(ペスト)はヨーロッパ全人口の3分の1以上を死に追い遣ったことが記録されています。このペストの流行はドイツにも及び、時の諸侯フリードリッヒが住民に対して避難するように命じた際に、あの宗教改革者ルターがそれを拒否し、その理由付けのために書いた「公開書簡」が残されています。ある宗教改革研究者は、この手紙の内容を分かり易く、次の3点にまとめています。それは、(1)困難な時こそ神

の召しに忠実であれ、(2)不必要なリスクを避けよ、(3)人々への配慮を忘れるな、ということです。

ここで、それら3点について少し考えてみましょう。(1)については、神から与えられた使命を忠実に果たせということです。現在の状況と重ねて言うならば、命の危険に晒されながらも使命を果たすために日夜労しておられる人々(特に医療従事者、保育士、介護福祉士など)に敬意を表わし、その働きがスムーズに遂行されるよう協力を惜しまないこと、また、教育や行政に携わっている人々は、喫緊の問題と向き合い、逃げ腰にならずに、保身に走らず、自らの職務に忠実であることが求められていること、また、生徒・学生の皆さんは、制約された状況の中にあっても、学ぶこと、自らの成長のために努力すること等が挙げられましょう。(2)の論点を現実にあてはめてみると、不要不急の外出、「3密」を避けること、また、恐怖のあまりパニックに陥らずに、冷静かつ正しく対処すること等が語られていると思います。(3)の事柄について、まず大切なのは「命への配慮を怠らないこと」、その点では、「何人の死亡者」という毎日の報道に対して心を麻痺させるのではなく、一人ひとりの掛け替えのない命が奪い去られようとしていることを心に留め、また、今回のウイルス禍によって仕事を失い、住む場所さえ脅かされている人々がいることに思いを向けることなどが挙げられると思います。それゆえ、日々出会う隣人への心遣いと思いやりを持つことが大切ですが、そのためにも自分自身の心身の健康に心を配ることを忘れずに「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ(レビ記19:18)」との言葉に耳を傾けたいと願っています。

以上、現時点で考えたことを率直に述べさせて頂きました。現在の状況はもうしばらく続くと思われますが、そう遠くない将来、必ずや収束のときを迎えることができると信じています。

どうか皆さん、一日一日を大切にしながら、出会う人々と平和にお過ごしください。共に耐え忍びつつ手を携えて、この試練の時を乗り切って参りたいと願っています。

お一人お一人の上に、神の豊かな支えと守りがありま

すよう心からお祈りいたします。

2020年4月17日

『ポスト・コロナに向けて=<利己主義>から<利他主義>への方向転換』

新型コロナウイルスの脅威が世界を覆い尽くしてから四か月目を迎え、漠とした形ではあるが、近い将来に収束するとの希望的観測が行きかう流れと相前後して、その後世界はどこに向って歩み出すのか、また、日本の今後はどうなるのか等々の問いや疑問が取り沙汰され、各分野の専門家や識者たちが未来像を呈示しています。しかし、このテーマは一部の専門家に任せるのではなく、21世紀に生きるわたしたち一人ひとりに向けられた問いでもありますから、今後の世界の動向や日本の歩むべき方向、さらには、日本のキリスト教学校の今後について共に考えることは重要な事柄であると思います。昨今のわたしは、キリスト教学校の一つである、関東学院の教学の責任を担う者として、コロナ禍の影響で時代が大きく変化しようとする中で、キリスト教学校として、この状況下で為すべきことは何かとの問いの前に立ち竦んでおりました。そんな問いを抱えながらゴールデンウィークに突入し、何処にも行けずに‘Stay Home’を励行し、早朝の散歩と妻と食事をする時間以外は、最近のコロナ禍に関する書物・論評等を読み耽り、録画した「緊急会談」を観たり、新聞の「社説」や各分野の専門家たちの論説等に目を通すことで、今後への何らかの示唆や洞察を見出したいと願ったことです。以下の拙文は、わたし自身が印象に残った知見や論説を取り上げ、今後のキリスト教学校の存在意味と使命についての私見を書き記したものです。この問いは極めて根本的な問いであり、容易に答えが出てくる事柄でないことは承知していますが、これら重要かつ喫緊の問題に対する見解を発信させて頂くことによってデスカッションの輪が広がることを願い、投稿させて頂きました。

今回は、最近眼に触れた多くの学者・識者の論説や言及の中で、特に印象に残ったフランスの思想家・作家のジャック・アタリ氏の主張を紹介したいと思います。彼は1981年から1991年にかけてミッテラン大統領の政治顧問を務めたほか、歴代の大統領に時宜に適った提言を行い、政治・経済・文化の分野で、フランスのみならず世界のグローバル思想家として重要な役割を果たし、数あ

る著作の中でも『2030年ジャック・アタリの未来予測』（林昌宏訳、プレジデント社、2017年）は日本でも読者の多い著名な作家です。この紙面で取り上げたいのは、4月11日夜のETV特集「緊急対談＝パンデミックが変える世界～海外の知性が語る展望～」におけるアタリ氏の発言内容についてです。これは、コロナ禍により世界がパラダイム転換を迫られる中で、海外の著名な学者、有識者から意見を聴取すると言った番組で、道傳愛子キャスターが司会を務め、アメリカの国際政治学者イアン・ブレマー氏、イスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリ氏、そして、ジャック・アタリ氏と順次、見解を聞いていくプログラムで、いずれの識者からも大変有益な示唆を与えられました。他の二人について論ずることは別の機会に譲って、今回はアタリ氏の提言に注目してみたいと思います。彼の発言の中で、特に感銘を受けた主張は、道傳氏の「このパンデミックの中で差別や分断が以前より目立ってきているのではないかと懸念していますが…」との問いに対して、アタリ氏は「パンデミックの中では、連帯のルールが破られ、利己主義が横行し、経済的な世界においても孤立主義が高まる危険性が強く、排外主義的なポピュリズムが台頭している。そうした中で、バランスの取れた連帯の輪を拡げる必要があるが、今回の危機に直面して、人類に対して「利他主義(Altruism)」への転換を求めたい。…パンデミックという深刻な危機に直面した今こそ『他者のために生きる』という人間の本質に立ち返らねばならない。協力は競争よりも価値があり、人類は一つであることを理解すべきだ。利他主義という理想への転換こそが人類サバイバルのカギである」と語り、さらに「自らが提唱する利他主義とは合理的利己主義であり、自らが感染の脅威に晒されないためには他人の感染を確実に防ぐ必要がある。利他的であることは、ひいては自分の利益にもなることで、他の国々が感染しないことも自国の利益になる。日本の場合も世界の国々が栄えていれば、市場が拡大し、長期的にみて国益につながります」と語っています。また、道傳氏が「利他主義とは他者の利益のためにすべてを犠牲にすることではなく、他者を守ることこそが我が身を守ることであり、家族、コミュニティ、国家、そして人類の利益にも繋がりますね」と問うたのに対し、アタリ氏は「その通りです。利他主義とは最も合理的で利己主義的な行動なのです」と答えています。

対談はさらに続きますが、今回はこれぐらいにしたいと思います。わたしは、アタリ氏が「世界が分断、孤

立、排外へと移行する中で、利己主義から利他主義への転換こそが、人類が生き残るための唯一のカギである」と強調している点に共感を覚えました。ここで、アタリ氏が言わんとする「利己主義」と「利他主義」との関係性についてはもっと丹念に論ずる必要がありますが、キリスト教の考え方において、人間の罪の実相は「利己主義(Egoism)」にあり、その超克はいかにして可能かとの問いは根本的(Fundamental)な命題です。また、その「利己主義」を超克する事柄と、「他者のために生きる」生き方へと転ずる「利他主義」とは裏表の事柄であることを受け止める必要があります。いずれにせよ「利己主義」「利他主義」を巡って、活発な議論が生まれてくるような予感が致します。この辺りについては、次回に述べさせて頂きたいと思います。

最後に、わたしは今回、アタリ氏をはじめとする識者たちの提言を聞き、色々と思い巡らす機会を得て、キリスト教学校には今後も大切な使命が残されていると痛感しました。時代が大きく変わろうとも、聖書が語る普遍的な真理(隣人愛、他者のために生きる、自己中心の生き方からの解放、平和を希求する等々)について、学生・生徒・児童に愛情と自信を持って語ることによって、双方向的対話が生まれていくものと信じています。日本各地にあるキリスト教学校が、こうした困難な時代にこそ、主から託された使命があることを覚え、共に前に向かって体を伸ばして参りたいと願っています。それぞれのキリスト教学校の歩みの上に、主の守りと祝福をお祈りいたします。

2020年5月18日

「いま考えるべきことを忘れまい」

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う自宅待機は、心静かにこれからの事柄を考えるひとときになりました。今回は、学院長メッセージの最終編として、三つの聖書箇所を紐解きながら、今後の私たちの在り方について考えてみたいと思います。第一のこととして、コロナの原因、その責任は究極的にはわれわれ人間にあるということです。イタリアの新進気鋭作家パジヨロ・ジョルダノーが今年2月末、イタリアでコロナ感染者が出始めた頃から数週間に亘り、外出制限下でつづった27編のエッセイ集『コロナの時代の僕ら』(飯田亮介訳、早川書房、2020年4月20日)は、コロナ禍のあと、人間が忘れてならないこと、大切にすべきことについて示唆を与えてくれ

る好著です。ジョルダノー氏は、トリノ大学で素粒子研究における理論物理学で博士号を取得した異色の作家ですが、彼は、本著において、コロナの最終責任をアジア人に課そうとするような狹隘な論説を退け、「どうしても犯人の名を挙げろと言うのならば、すべて僕たちのせいだ。『僕たち』、つまり全人類のせいだ」と語り、さらに「僕は忘れたくない。今回のパンデミックのそもそもの原因が秘密の軍事実験などではなく、自然と環境に対する人間の危うい接し方、森林破壊、僕らの軽率な消費行動にこそあることを…」と語っていることに注目すると共に、旧約聖書ホセア書に記された以下の言葉に目を止めたいと思います、「イスラエルの人々よ、主の言葉を聞け。主はこの地に住む者と争われる。この地には真実がなく、愛情がなく、また神を知ることもないからである。ただ呪いと、偽りと、人殺しと、盗みと、姦淫することのみで、人々は皆荒れ狂い、殺害に殺害が続いている。それゆえ、この地は嘆き、これに住む者はみな、野の獣も空の鳥も共に衰え、海の魚さえも絶えはてる(口語訳4:1-3)」。これを書いたホセアは、B.C.7世紀にイスラエルで活躍した無名の預言者でしたが、その彼が今から2800年もの昔、人間社会の文化的荒廃と人心の乱れ、犯罪、邪悪との因果関係、さらにはそれと連動して自然環境が破壊され、ついには地球全体の生態系に乱れが生じることを予見していることに驚きを覚えますが、考えてみれば、これはまさに現代における世界の情勢そのものではないでしょうか。キリスト教の生態学的視点で言えば、欧米中心のキリスト教神学が、自然を支配し搾取する対象として捉える考え方を凌駕できなかったことを反省し、人間以外の生命の諸形態に対する連帯性を志向し、自然及び動植物を含むすべての生態系との「共生」を標榜することが求められているといえましょう。すなわち、これから21世紀を生きる私たちは「人間中心主義」から「生命中心主義」へと発想を転換し、神から委託された、生命圏全体の「良き管理者・奉仕者(Steward)」としての役割を再認識し、次世代との連帯的責任を果たしていく必要があるのではないのでしょうか。

この辺で、第二の聖句に移りたいと思います。前号において、ポスト・コロナの時代における指針として、ジャック・アタリ氏の「利己主義」から「利他主義」への転換こそ、人類が生き残るためのカギであるとの見解を紹介しましたが、この事柄との関連において、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい(レビ記19:18)」との聖書の言葉を学んでみましょう。これは、旧約の律法に

において「隣人愛の勧め」として有名な戒めですが、ここで注目したいのは「隣人を愛せよ」との言葉の前に「自分を愛するように」との言葉が置かれている点です。「自分を愛する」とは「自分が可愛い、愛おしい」ということではなく、また「自分さえ良ければ」と自分に執着する「自己愛」のことを指しているのではありません。それならば「自分を愛する」とは、一体どのようなことを意味するのでしょうか。ここで「自分を愛する」という場合、その前提として、自分が何者であるかを知ることが大切です。16世紀のフランスの宗教改革者カルヴァンは「自分を知ること」と「神を知ること」とは表裏の事柄であると言っています。それゆえ、「自分を知る」とは「神の前にある自分を知る」ことを意味します。神の前での自分は「弱く惨めで取るに足らない者であること」に気付かされるのです。そのような者であるにもかかわらず、愛され、受け入れられ、支えられ、今日あることに気付かされると、はじめて、自分を受け入れること（「自己受容(Self-acceptance)」）ができ、「自分を愛すること」が可能になるのです。その時、自分を愛し、自分を掛け替えのない存在として受け入れ、大切に思うことができると共に、自分が出会い、関わりを持つ隣人をも掛け替えのない存在として受け入れ、愛する者となるのです。その点において「自分を愛すること」と「隣人を愛すること」とは深い所で一つになるのです。パンデミックという危機に直面した今だからこそ、「他者のために生きる」という人間の本来的な在り方に立ち返り、自己中心的な生き方から解放され、他者のために生き、他者と共に和解の道を追求求め、人類の恒久的な平和実現のために寄与する使命が私たちに求められているのではないかと思います。

第三点目として、わが学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」との関連で、主イエスが「山上の説教」で語った言葉、「何事でも人々からして欲しいと望むことは人々にもそのようにしなさい(マタイ7:12)」について学んでみましょう。この言葉は、欧米では「Golden Rule (掟の中の掟)」、日本では「黄金律」と呼ばれ、社会倫理の最高峰として多くの人々に多大な影響を与えてきました。しかし、なぜか日本人には馴染まず、「相手に良くしておけば見返りがくる」、「情けは人のためならず」等々、世渡り上手の処世訓程度に考えられてきた節があります。なぜ日本人にとって、この「黄金律」が身近な教えとして響かないのかと問えば、日本人の文化形態は、相手の出方を見てからこちらの態度を決すとか、様子見の姿勢が肝心だとか、根

回しをした上で話を進める等々、総じて「受身」の形態が根強いことと関連しているように思われます。わたしは10年ほど前、大学工学部で30名ほどの学生相手に夜間の授業をしていて、「黄金律」について学生たちとデスカッションした時の事を想起することができます。わたしが彼らに「君たちにとって、一人の人間として、一番人からして欲しいと願うことは何か」と尋ねました。しばしの沈黙のあと、男子学生が恥ずかしそうに「人間みな、独りぼっちじゃないですか。だから自分は、人に受け入れて欲しい、存在を認めて欲しい、ありのままの自分を愛して欲しいと思うのではないですかね」と答えてくれました。わたしは間髪を入れずに「そうだね。人間みな独りぼっちだから、自分を受け入れて欲しい、自分の存在を認めて欲しい、ありのままの自分を愛して欲しいと願っている。きっと主イエスは人間誰しもが持つ潜在的・究極的愿望に共感し、それならば、あなたの方から進んでいって、あの人、この人を受け入れ、その存在を認め、ありのままを愛しなさいと語っている。…主イエスの説く愛のわざとは、相手の出方でどうこうせずに、自発的に愛のわざを実践しようとする姿勢を言わんとしているのかもしれないね」と語り、さらに「自分の思いですぐ行動に出る前に、相手が何を欲しているのか、欲していないのかを見抜く洞察力とそれを感じ取る感性を磨くことの大切さを示唆しているのではないか」と語りました。するともう一人の学生が「黄金律と校訓『人になれ 奉仕せよ』とは深い所で繋がるのではないのでしょうか」と語り、わたしの20年間の教師生活の中でも忘れられぬ授業となりました。

関東学院は、今年で創立136周年を迎えますが、時代が変わろうとも、いや逆に、コロナ禍のような事態に遭遇しようとも、変わることはないキリスト教の普遍的な真理、価値観、人間観を、これからも内外に発信する学院であり続けたいと願っています。皆さま、お一人お一人の上に、主の変わらぬ守りと祝福がありますように、心からお祈りいたします。

2020年7月3日

関東大震災後の「中学関東学院」におけるキリスト教教育

—賀川豊彦・山室軍平・金森通倫 等をめぐって—

関東学院 学院長付（学院史資料担当）

渡邊 茂

「日米開戦80年」を迎えて

今年2021年の年末には、第二次世界大戦の重要な一部分を形成するアジア・太平洋戦争における「日米開戦」（1941年12月）から80年を迎えます。

前年度におきましては、拙稿「日米関係史のなかの『中学関東学院』—関東大震災後の一側面—」（『学院史資料室ニュース・レター』第23号、2020年3月）で、「中学関東学院設立100年」（2019年1月）を経た時点で、20世紀前半のアメリカ合衆国において成立した「排日移民法」（1924年）とその影響、第一次世界大戦後「パクス・アメリカナ」の時代の一側面について振り返りました。

『学院史資料室ニュース・レター』第23号の発行人も現学院長である松田和憲学院長でした。前掲拙稿の執筆に際しては、松田学院長が専門とされる組織神学（実践神学・宣教学）の観点からも、20世紀における「宣教」（宣教師）の問題点に関してご指摘を承る機会を得ました。また、松田和憲著『宣教の神学：パラダイム転換を目指して：現代日本の「宣教の神学」研究』増補改訂版（関東学院大学出版会、2019年）が刊行されましたことは、「建学の精神」を再確認する契機の一つにもなるものと存じます。

「バプテスト」でない日本人キリスト者

第一次世界大戦後にアメリカ合衆国が「パクス・アメリカナ」を形成していく時代、アメリカ・バプテスト教会の宣教師C・B・テンネーによって設立された「中学関東学院」は、そのテンネーによって招聘された「院長」（校長）坂田祐のもとで、関東大震災（1923年9月）に遭遇し、校舎の崩壊等物心両面で悲劇的な痛手を受けました（『関東学院百年史』、302-343頁参照）。

第二次世界大戦後においても、坂田祐は「わたしの生涯に於て、わたしにとって最も重大なことは、わたしが一高在学中に、内村鑑三先生の弟子となったことである。」（坂田祐著『新編 恩寵の生涯』復刻版、学校法人関東学院、2018年、74頁）と確言します。その内村鑑三は「無教会」のプロテスタント・キリスト者として知られています通り、「バプテスト教会員」でないのは勿

論のこと、そもそも「キリスト教会員」ではない、ともいわれ得るものと存じます。

かつて内村鑑三を賀川豊彦と比較して論じた由木康は、毀誉褒貶相半ばすることで共通する二人への「悪評」について次のように述べています。

「内村は不敬漢、非国民、国賊、にせ聖人、教会荒らし、さわもの師、離婚常習者（妻を代うること弊履のごとし）などと罵倒されたし、賀川も売名家、銜学者、煽動家、オッチョコチョイ、神学のない男、大馬鹿者などと侮蔑の言葉を浴せられた。」（由木康著『私の内村鑑三論』教文館、1978年、118頁）と。

21世紀の今日において、『内村鑑三 悲しみの使徒』（岩波新書、2018年）を著した、カトリックの若松英輔氏は次のように論じています。

「吉満義彦と賀川豊彦、二十世紀前半の日本キリスト教思想界における代表的人物だった二人の接点は、これまでほとんど論じられていない。・・・そこで論究されるべきは、日本キリスト教における「民衆」的信仰の形成史にはかならない。・・・キリスト教の伝来が単なる外来の文化の受容ではなく、日本人の救済と直結する出来事であることを実証すること、それが哲学者吉満義彦の根本問題だったといつてよい。」（若松英輔著『吉満義彦—詩と天使の形而上学』岩波書店、2014年、15-16頁）と。

救世軍の山室軍平が19世紀末の明治期（新島襄を慕って）同志社に学んだ頃には、当時流行の「新神学」（自由主義神学）を主唱していた金森通倫（自由民主党の石破茂 元幹事長の曾祖父としても知られる）の後半生について、かつて関東学院六浦中学校・高等学校教諭の一人であった私は、同校でご教示を受けた大井人（じん）宗教主任による論考「金森通倫一人とその思想変遷」（『六浦論叢』第25号、1988年12月）からも示唆を得ました（同第25号には、拙稿『昭和』の知識人—吉満義彦をめぐって—も掲載されています）。

因みに、同志社時代に「苦学生」であった山室軍平にとって、金森通倫は「恩師かつ生活面の工面をしてもらった恩人」（室田保夫著『山室軍平』ミネルヴァ書房、

2020年、156頁)でもありました。

なお、日本バプテスト同盟の牧師としてバプテスト教会の伝統を担われる立場からの論考、大井人「バプテストマについての一考察—浸礼の歴史を踏まえて—」(『六浦論叢』第29・30合併号[創立40周年記念号]、関東学院六浦中学校・高等学校、1993年10月)では、大井宗教主任にとって「関東学院大学神学部」での恩師である組織神学者の清水義樹による「浸礼」への志向が継承されています。また「六浦中高 設立40年」当時の石田昭義校長は、関東学院 学院長にもなりました。

「学院史」との関わり等

近代日本におけるバプテスト教会の(週刊の)機関紙『基督教報』には、関東大震災後の東京学院(今日の関東学院「第二の源流」)や中学関東学院(同じく「第三の源流」)に関する報告もなされています。

例えば関東大震災直後、1923年10月の紙面では、当時の東京学院長(後には関東学院長[第3代学院長])千葉勇五郎が、バプテストの神学者として日本の教会の「自給独立」を志向しつつ次のように述べています。

「日本バプテストは永く他に依頼すべきではない、教育事業に於ては尚暫く外國の兄弟らの助力を仰がなければなるまいが、傳道の方面に於ては、もう獨立する覺悟がなければならぬ。」(千葉勇五郎「世界バプテスト大會」、『基督教報』第718号、1923年10月24日、4頁)と。震災の翌年、1924(大正13)年1月の紙面「教況」欄には「捜真女學校近況」として、次のように記されています。

「精神的方面の教育高調の必要を感じ[1923年]十二月には山室軍平氏を聘して信仰のすゝめを願ひ求道者五十餘名を得たるが、来る[一月]二十九日には賀川豊彦氏の講演を聞く筈なり。現在は關東學院の便宜をはかりて午後は同校の用に供しつゝあり、校内極めて活氣に充てり。」(『基督教報』第729号、1924年1月18日、7頁)と。その翌月、2月の「教況」欄には次のように報告されています。

「先頃賀川[豊彦]氏を迎へて四百人の學生に傳道し百四十二人の決心者を得た。其一人は私である。私は其牧者となりたいと云ふ決心をした。私は未だ日本基督教會の會員であるから生徒と一緒にバプテストマ[浸礼]を受けやうと思ふて居る。」(「關東學院」高谷[道男]氏談、『基督教報』第733号、1924年2月15日、7頁)と。

因みに中学関東学院においては、1924年3月(同じく

バプテストの伝統に立つ)捜真女學校講堂をお借りして、第一回卒業式が無事に行われました(前掲『関東学院百年史』、321-324頁参照)。

関東大震災から一年を経た1924年9月の「教況」欄には次のような報告もなされています。

「昨年九月震災當時に於て吾等日本人が、朝鮮並に支那の同胞(日本人それ自らに對してさへ)に犯せる重大なる罪惡に就て、其當時の事を回想し、他の罪を負ひ給へし十字架の基督を主と信ずる、我等基督者が基督の精神に基づき、吾日本國民に代りて懺悔祈禱の集りを開き、且つ今後の事についても懇談いたしたいと思ふのであります。……(發起人、賀川[豊彦]、鵜崎[庚午郎]、小崎[弘道]外三名)」(「懺悔祈禱會」、『基督教報』第760号、1924年9月12日、7頁)と。

当時の「日本基督教聯盟」等で、千葉勇五郎とも深交のある「日本メソヂスト監督」鵜崎庚午郎は、関東学院六浦小学校の鵜崎寿教諭の曾祖父にあたります。

因みに、大正期日本におけるバプテスト教会の自己認識としては、例えば次のようにも表白されています。

「今日では日本基督教會が我邦に於ては最も優勢で、其次がメソヂスト教會、其次が組合教會と云ふ順序になつて居る。どうか我がバプテストを我が日本に於ける第一等の地位まで進めたいものである」(「日基及び組合の現状」、『基督教報』第767号、1924年11月7日、2頁)と。

翌1925(大正14)年、対外的には幣原喜重郎外相(敗戦後「日本国憲法」制定過程では首相)による国際協調外交「幣原外交」のもとで「ソ連」(ソヴィエト社会主義共和国連邦)との国交樹立が実現し、国内的には帝国議會で「治安維持法」と「普通選挙法」とが成立しました。因みに、第一次世界大戦後と第二次世界大戦後との「二つの戦後」における「パクス・アメリカーナ」への日本の適応を繋ぐ役割を担った親英米派の中樞の一人として、幣原喜重郎が存在しました(三谷太一郎著「二つの戦後—パクス・アメリカーナと日本の『デモクラシー』—」、『人は時代といかに向き合うか』東京大学出版会、2014年、41-59頁参照)。

同1925年10月の「教況」欄には、「大正十四年十月八日、九日」の二日間に亘り、東京赤坂の靈南坂教会で開催される「第三回日本基督教聯盟總會順序」が次のように掲載されています(一部分抜粋で引用)。

「第一日(……)」

△説教 午前九時十五分 鵜崎庚午郎(……)

△講演 午後二時-三時「社會問題と基督教會」賀川豊彦(・・・)

△懇談 午後七時-九時(1)「教化運動繼續の可否に就て」千葉勇五郎(・・・)

第二日(・・・)

△講演 午前七時廿五分-十時十分「基督教と國際關係」アキスリング(・・・)》(『基督教報』第811号、1925年10月2日、8頁)と。

因みにバプテスト宣教師アキスリングは、同年9月の時点で、次のように述べていました。

《私はアメリカに滞在中、三萬哩を旅行し、約三百五十ヶ所で演説をしました。最後の二ヶ月は太平洋沿岸で過し・・・九十回の演説を爲しました。其演説は排日法や、人種關係や、日米關係や、太平洋の將來などに關するものでありましたが、人々は豫期以上によく聽いてくれました。・・・アメリカでは、世界の中心は太平洋に速かに移りつゝある事と、將來に於ては東洋は世界の將來を決定する上に更に大なる役割を勤めんとしつゝある事とを益々認めて來て居ります。・・・一九二五年九月七日東京に於て ウキリヤム・アキスリング》(「愛する同勞者に贈る」、『基督教報』第810号、1925年9月25日、4頁)と。

また、この時期の『基督教報』にも一貫する「自給独立」への志向は、例えば次のように記されています。

《日本の傳道は出來得る丈け早く日本のクリスチアンによつてせらるべき者である。我等は衷心より米國の兄弟姉妹等の好意を感謝する者である。然し日本傳道の責任は日本の基督者の双肩にかゝれる事を思はなければならぬ。》(「我等は基督の證人なり」、『基督教報』第815号、1925年11月6日、1頁)と。

「パクス・アメリカナ」のもとで、日本の「独立自尊」(福沢諭吉)という国民的課題をどのようにして実現するのか、という21世紀今日の問題とも通底する事柄であろうかと存じます。(勿論、福沢諭吉の生きた19世紀は「パクス・ブリタニカ」の時代でしたが。)

なお、1925年当時の賀川豊彦について、古典的評伝である隅谷三喜男著『賀川豊彦』(岩波現代文庫、2011年)には、次のように記述されています。

《一九二五年夏のイエスの友会の修養会は、「百万の靈を神に捧ぐ」運動を決議した。当時日本のプロテスタント教会の信徒は一六万にすぎなかった。賀川は少なくとも百万の信徒がいなければ、キリスト教は一つの社会的勢力となることはできない、と考えたのであ

る。同年末、基督教連盟の協議会で、賀川は「百万人救霊運動私案」を発表し、教派をこえて大挙して伝道にあたるべきことを主張し、その具体策として、農民伝道、労働者伝道、漁村伝道、坑夫伝道等の方策を提示した。だが、これもまた大部分机上のプランに終わってしまった。日本のキリスト教会は動き出さなかった。かれは教会にいよいよ失望を感じた。》(同上、173頁)と。

「高等批評」をめぐる

関東大震災前年(1922年)年末12月の記事では、金森通倫について次のように紹介されています。

《金森通倫氏が英文で記された自叙傳をテンネー博士から借りて讀んだ。・・・此書は昨年米國ヒラデルヒアに於て、日曜學校タイムス社より出版したもので、如何にして高等批評が日本の基督者を破壊し、如何にして彼が復歸せしかを示すものであると書いて居る。》(「金森通倫氏自叙傳」、『基督教報』第679号、1922年12月13日、4頁)と。

上記引用文中にもある「高等批評」(近代聖書学における歴史的批評的研究)に関して、当時の坂田祐は、「關東學院長 文學士」として、次のように回想していました。

《内村[鑑三]氏の雑誌で教へられた、聖書は神の語りなり之を遵奉すべしと云う信仰を起した、[東京帝國]大學で高等批評もきいたけれども、實驗したことは之が爲めに變はらなかつた、十字架の救は科學的に分析しても解らない之を直観すべきである》(「信仰實驗談」、『基督教報』第654号、1922年6月7日、4頁)と。

因みに、関東大震災直前、1923年8月の「教況」欄、「松本[バプテスト教會]」には、大正期日本の精神的雰囲気(エートス)を反映し、後に代表的カトリック哲学者として上智大学や東京帝国大学でも教えることになる吉満義彦の青年期(内村鑑三のもとで学ぶプロテスタント・キリスト者であった)の一面も次のように伝えられています。

《[1923年]七月十四日の夜には、基督教青年同盟本部の學生部の學生傳道隊の一行の一人にて、第一高等學校生、吉満義彦氏の講演ありて、來會者四十餘名にて近來の盛會であつた。》(『基督教報』第713号、1923年8月22日、9頁)と。

この記事には、若松英輔氏の着目されている「吉満義彦と賀川豊彦、二十世紀前半の日本キリスト教思想界における代表的人物だった二人の接点」(前掲『吉満義彦一詩と天使の形而上学』、15頁)が、図らずも、その当

時のバプテスト教会機関紙『基督教報』において示されている場面であるように存じられます。

20世紀に「カール・バルト」(小川圭治 関東学院 学院長はかつてスイスのバーゼル大学で直接師事しました)や、「ルドルフ・ブルトマン」(八木誠一 関東学院大学 神学部助教授)等によって探究されてきた事柄を、恰も(カラスの勝手で?)「超越」しているかのように「アドルフ・フォン・ハルナック云々」などと吹聴する著書が、岩波書店により絶版・回収された「曲学阿世の徒」が実在する21世紀の日本においても、「高等批評」をめぐる問題は、示唆を与えられる出来事である「かのように」(森鷗外)も考えられます。

現代日本における新約聖書学研究史の一端については、碩学の一人で前学院長である小河陽著『新約聖書に見るキリスト教の諸相』(関東学院大学出版会、2017年)、及び、小河陽訳『ヨハネの黙示録』(講談社学術文庫、2018年)もご参照いただければと存じます。

「キリスト教教育」の原点

近代日本のキリスト教教育の展開において、多様な源流に連なる各学校独自の文字通りの意味でのユニークな史的特性が存在するのは、日本プロテスタント・キリスト教史の文脈において、むしろ当然のことと存じます。

その一方で、普遍的な「キリストの福音」を伝達すること、文字通りの意味での「伝道」が共通の使命(ミッション)とされてきたことも確かで、20世紀前半の大正末期(関東大震災後の不安と絶望の中)関東学院での「バプテスト」でない日本人キリスト者による伝道が、バプテスト教会の機関紙である『基督教報』において報告されているのは示唆的です。

しかも当時の関東学院における伝道の方法的なあり方には、欧米バプテスト教会の歴史的伝統ともいえるべき「リヴァイヴァル」(信仰復興運動)との親和性も示されています。

前掲拙稿「日米関係史のなかの『中学関東学院』—関東大震災後の一側面—」(『学院史資料室ニュース・レター』第23号)においても触れましたように、1924(大正13)年5月、米国連邦議会での排日移民法成立は、第一次世界大戦後のアジア・太平洋地域における国際協調体制「ワシントン体制」確立直後の「不幸な事件」(五百旗頭真編『日米関係史』有斐閣ブックス、2008年、98頁)とも位置付けられています。

後の「日米開戦」(1941年12月)の遠因の一つともいわれ得る「排日移民法」(筒井清忠著『満州事変はなぜ起きたのか』中公選書、2015年、80頁)について、1924年11月の「教況」欄には「テンネー博士の演説」として、次のように記載されています。

《昨年[1923年]の震災災[関東大震災]によつて、日本傳道事業は一大打撃を加へられて居る處に、本年[1924年]五月米國が日本との紳士協約を否認したことゝ、移民法案[排日移民法]を作つたことによつて一層の困難を感じるに至つたのである……米國が移民法を可決したことは、實に正義人道に悖る行爲であり、日本の自尊の誇を傷けたる恨事である。》(『基督教報』第769号、1924年11月21日、7頁)と。

この記事には、近代日本におけるキリスト教の伝道と教育とに献身的に携わり「学院史」とも深く関わる「バプテスト」のアメリカ人宣教師テンネーによる「内憂外患(天災と人災)」への深い落胆が、率直に表白されているようにも存じます。「日米開戦80年」に際しても、再確認する機会を得られればと考えます。

松田和憲学院長は「横浜バプテスト神学校」からの「創立135年」を想起する説教「行く先も知らずに：ヘブライ人への手紙11章8節、13～16節(新共同訳)」(『いんまぬえる』第139号、学校法人関東学院、2019年12月、3頁)で「テンネー先生」に注目し「創立一三五周年に当たり、学院のため生涯を捧げた先達の信仰的姿勢に想いを馳せたい」と述べられました。

本稿擲筆にあたりまして、前掲『関東学院百年史』(学校法人関東学院、1984年10月6日発行)の刊行時に学院長であった柳生直行訳による『新約聖書』の証言を、前第23号拙稿と同様に、再度引用いたします。

《今われわれが受けている、この世かぎりの軽い患難は、やがて、永遠の圧倒的な栄光に取って代られるのである。われわれは見えるものではなく、見えないものに目を向けている。見えるものは過ぎ去ってしまうが、見えないものは永遠に存続するからである。》(『第二コリント書』第4章17-18節、『新約聖書』柳生直行訳、新教出版社、1985年、378-379頁。)

◆関東学院六浦こども園のステンドグラス◆ - 作品テーマ「悦び」 -



世界的なガラスアーティスト三浦啓子氏による作品
詳細は本誌8ページに記載あり

◆学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆さまに学院に関係する資料・情報の寄贈をお願いしております。
お借りした資料は処理が終わりましたら返却させていただきます。
お手元にあります学生時代のお写真や学院のパンフレット、式典、学祭の配布物など、大切な記録かと思いますが、学院史資料の収集にご協力いただけますよう、お願いいたします。資料のご提供については以下にご連絡ください。

TEL. 045-786-7066, E-mail. archives@kanto-gakuin.ac.jp 学院史資料室事務室

編集後記

2020年は新型コロナウイルスについての話題を取り上げざるを得ません。もちろん本学院も影響を受け、これまでとは異なる授業や運営体制を取り、また現在もそれが続いています。2019年、台風19号の時の行事中止に続き、本年度も行事に影響が出るなど、自然の影響をまたも受けました。このことは後の世でどのような記録として残るかはわかりませんが、歴史の一つとして残したいと考えています。

さて私は、この2020年10月に当事務室にまいりました。学院の歴史を物語る膨大な資料を前に、今後どのように保存、公開していき、次の世代に引き継いでいったらよいか、日々考えております。資料にある文章を書いた方々、写真に写っている方々、貴重な資料をお寄せいただいた方々、すべてによって本学院の史資料が成り立っていると考えると、身の引き締まる思いです。この『ニュース・レター』は皆さまとの接点の一つです。引き続き皆さまからのご支援、ご協力を得ながら、本誌を作成していきたいと考えています。

◆学院史資料等、ご返却のお願い◆

以前に当資料室や坂田記念館から研究等のご利用目的で貸し出しました資料のうち、未だご返却いただけないものが多数ございます。もしもお手元にありましたらご返却をお願いいたします。

学院史資料室事務室 室長 田中宏治

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第24号

発行日 2021(令和3)年3月1日

発行人 関東学院 学院長 松田 和憲

編集 『関東学院学院史資料室ニュース・レター』編集委員会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2932